

福井県埋蔵文化財調査報告 第11集

六条・和田地区遺跡群

—県営緑農住区開発関連土地基盤整備事業に伴う緊急調査—

昭和 61 年 度

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第11集

六条・和田地区遺跡群

—県営緑農住区開発関連土地基盤整備事業に伴う緊急調査—

昭和 61 年 度

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序

福井市街地の東の一帯は、美しい水田の中に集落が点在している。これらの集落は、福井平野を奔放に流れた足羽川の支流が形成した自然堤防上にある。

昭和54年度からこの地に計画された福井県営緑農住区開発関連土地基盤整備事業は、外周面積約549ヘクタールに及ぶ大規模なものであった。この事業が実施されると自然堤防上に立地する多くの遺跡が破壊されることになり、事前に綿密な協議が為された。その結果、現在の水田面については耕作土だけを移動することにして、深く掘削される水路部分だけを調査することにした。調査は、昭和55年度から昭和61年度までの7年間のわたって実施された。ここにその発掘調査で得た成果を広く一般に公開するため、報告書を刊行した。なお、調査にあたっては地元の土地改良区をはじめ文化庁・福井県農林水産部農地整備課ならびに福井耕地事務所の関係者各位に厚く謝意を表するとともに、今後とも文化財保護についてなお一層の協力をお願いしたい。

昭和62年3月31日

福井県教育委員会

教育長 田 中 克 之

例 言

1. 本書は、『県営緑農住区開発関連土地基盤整備事業』に伴い、昭和55年度から昭和61年度までの7年間にわたって実施した発掘調査の報告である。
2. この調査は、六条地区で上蒔生田遺跡江鈴・ハケ坪・塚町地区、下蒔生田畑田遺跡、下蒔生田筆付遺跡、下蒔生田高野遺跡、下六条西九反田遺跡、和田地区で和田神明遺跡、和田防町遺跡で実施した。
3. 調査にあつては、国庫補助を受け、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。
4. 報告書の作成にあたり、整理・執筆は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの文化財調査員があたり、執筆分担者の氏名を文末に記した。
仁科章・中司照世・山口 充・工藤俊樹・富山正明・赤澤徳明、川村俊彦・水村伸行（以上調査補助員）
5. 第Ⅱ章 周辺の環境 第3節 歴史的環境は、地域的に重複するため上蒔生田遺跡第Ⅰ次調査の報告である「北陸自動車道関係遺跡調査報告書 第15集 上河北遺跡 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境」を参考にし、「北陸自動車道関係遺跡調査報告書 第11集 曾万布遺跡Ⅰ 第Ⅱ章 曾万布遺跡と周辺の歴史的環境」に加筆した。
6. 石材同定は、福井県立博物館学芸員東 洋一氏の教授を得た。
7. 調査に関係した機関・氏名は、以下のとおりである。（順不同）
文化庁・福井県農林水産部農地整備課・福井県教育庁文化課
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
藤原 武二（所長）
仁科 章（主査）
中司 照世（主査）
山口 充（主査）
工藤 俊樹（文化財調査員）
富山 正明（文化財調査員）
赤澤 徳明（文化財調査員）
8. 編集は山口 充があたった。

序

例 言 目 次

	頁
第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 周辺の環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 上蒔生田遺跡江跨・八ヶ坪・塚町地区	11
第1節 調査経過	11
1 調査概要	11
2 調査日誌抄	13
第2節 遺構	15
1 遺跡概説	15
2 遺構各説	15
1) 江跨地区	15
2) 八ヶ坪・塚町地区	17
第3節 遺物	21
1 遺物概説	21
2 遺物各説	21
1) 弥生・古墳時代	21
2) 律令時代	24
第4節 小結	46
第Ⅳ章 下蒔生田畑田遺跡	47
第1節 調査経過	47
1 調査概要	47
2 調査日誌抄	49
第2節 遺構	51
1 遺跡概説	51
2 遺構各説	54
第3節 遺物	74
1 遺物概説	74

	2	遺物各説	74
	1)	古墳時代	74
	2)	律令時代	74
第4節		小結	105
第V章		下蒔生田筆付遺跡	106
第1節		調査経過	106
	1	調査概要	106
	2	調査日誌抄	106
第2節		遺構	108
	1	遺跡概説	108
	2	遺構各説	108
第3節		遺物	112
	1	遺物概説	112
	2	遺物各説	112
	1)	古墳時代	112
第4節		小結	116
第VI章		下蒔生田高畔遺跡	117
第1節		調査経過	117
	1	調査概要	117
	2	調査日誌抄	117
第2節		遺構	118
	1	遺跡概説	118
	2	遺構各説	118
第3節		遺物	120
	1	遺物概説	120
	2	遺物各説	120
	1)	弥生・古墳時代	120
第4節		小結	124
第VII章		下六条西九反田遺跡	125
第1節		調査経過	125
	1	調査概要	125
	2	調査日誌抄	126
第2節		遺構	127
	1	遺跡概説	127

	2	遺構各説	127
第3節		遺物	131
	1	遺物概説	131
	2	遺物各説	131
	1)	弥生・古墳時代	131
	2)	律令時代	132
第4節		小結	144
第Ⅳ章		和田神明遺跡	145
第1節		調査経過	145
	1	調査概要	145
	2	調査日誌抄	146
第2節		遺構	147
	1	遺跡概説	147
	2	遺構各説	149
	1)	弥生(古墳)時代	149
	2)	律令時代	149
	3)	室町時代以降	150
第3節		遺物	158
	1	遺物概説	158
	2	遺物各説	158
	1)	弥生(古墳)時代	158
	2)	律令時代	165
	3)	中世・近世	176
第4節		小結	194
	1	弥生・古墳時代	194
	1)	遺構	194
	2)	遺物	194
	2	中世・近世	198
	1)	土師質における法量と用途の問題	198
	2)	まとめ	200
第Ⅴ章		和田防町遺跡 第Ⅰ次調査	201
第1節		調査経過	201
	1	調査概要	201
	2	調査日誌抄	202

第2節	遺構	202
1	遺跡概説	202
2	遺構各説	202
1)	古墳時代	202
第3節	遺物	207
1	遺物概説	207
2	遺物各説	207
1)	弥生・古墳時代	207
2)	律令時代	214
3)	室町時代(～江戸)	224
第4節	小結	227
1	遺構	227
2	遺物	227
第X章	和田防町遺跡 第Ⅱ次調査	230
第1節	調査経過	230
1	調査概要	230
2	調査日誌抄	236
第2節	遺構	239
1	遺跡概説	239
2	遺構各説	240
1)	掘立柱建物遺構	240
2)	柱穴列	249
3)	竪穴式住居跡	251
4)	井戸	252
5)	溝状遺構	254
6)	石敷路	260
7)	祭祀場	261
8)	周溝遺構	261
9)	土壌	264
第3節	遺物	268
1	遺物概説	268
2	遺物各説	268
1)	弥生時代	268
2)	古墳時代	269

3) 律令期	271
4) 中世	289
第4節 小結	304

挿 図 目 次

	頁
第1図 福井県地形区図	3
第2図 周辺重要遺跡分布図	10
第3図 上蒔田遺跡発掘調査位置図	12
第4図 SD-003実測図	15
第5図 SD-002 SK-004 SK-005実測図	16
第6図 SD-001・SD-006 実測図	16
第7図 SD-008・009実測図	17
第8図 SK-010実測図	18
第9図 SD-011実測図	18
第10図 SD-012実測図	19
第11図 SA-013・014実測図	19
第12図 SD-015実測図	20
第13図 1号方形周溝墓・西溝とSK-016実測図	20
第14図 石器実測図	24
第15図 SD-006出土土器に墨書された字句	25
第16図 和同開珎拓影	26
第17図 上蒔田遺跡江跨地区出土土器実測図(1)	37
第18図 上蒔田遺跡江跨地区出土土器実測図(2)	38
第19図 上蒔田遺跡江跨地区出土土器実測図(3)	39
第20図 上蒔田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器実測図(1)	40
第21図 上蒔田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器実測図(2)	41
第22図 上蒔田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器実測図(3)	42
第23図 上蒔田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器実測図(4)	43
第24図 上蒔田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器実測図(5)	44
第25図 上蒔田遺跡SD-006出土土器実測図	45
第26図 下蒔田畑田遺跡発掘調査区位置図	48
第27図 501号井戸実測図	54
第28図 下蒔田畑田遺跡井戸上・下端径計測グラフ	54
第29図 下蒔田畑田遺跡井戸底深さ・海拔計測グラフ	54
第30図 下蒔田畑田遺跡柱穴上下端径計測グラフ	57

第31図	198号柱穴実測図	5 7
第32図	3号土壙実測図	6 4
第33図	下蒔生田畑田遺跡遺構全体図	7 2
第34図	碧玉製管玉実測図	7 4
第35図	土錘実測図	7 4
第36図	下蒔生田畑田遺跡出土須恵器実測図 (1~38)	7 8
第37図	下蒔生田畑田遺跡出土古瓦実測図 (1~15)	7 9
第38図	下蒔生田畑田遺跡出土瀬戸・美濃製陶器実測図 (1~16)	8 2
第39図	下蒔生田畑田遺跡出土唐津焼 (1~6)・ 朝鮮製陶器 (7~20)・伊万里焼 (21~24)・漆器 (25・26)実測図	8 3
第40図	下蒔生田畑田遺跡出土石臼実測図 1 (1・2)	8 6
第41図	下蒔生田畑田遺跡出土石臼実測図 2 (3・4)	8 7
第42図	下蒔生田畑田遺跡出土石臼実測図 3 (5~7)	8 8
第43図	下蒔生田畑田遺跡出土石臼実測図 4 (8~11)	8 9
第44図	下蒔生田畑田遺跡出土石臼実測図 5 (12~15)	9 0
第45図	下蒔生田畑田遺跡出土火炉蓋実測図 (1~9)	9 3
第46図	下蒔生田畑田遺跡出土火炉身実測図 1 (10~15)	9 4
第47図	下蒔生田畑田遺跡出土火炉身実測図 2 (16~22)	9 5
第48図	下蒔生田畑田遺跡出土火炉・その他の石製品実測図 (23~29)	9 6
第49図	下蒔生田畑田遺跡出土その他の石製品実測図 (1~4)	9 7
第50図	下蒔生田畑田遺跡出土その他の石製品実測図 (5~14)	9 8
第51図	下蒔生田畑田遺跡出土木製柄杓実測図 (1・2)	1 0 1
第52図	下蒔生田畑田遺跡出土木製品 (1~8)・越前焼 (9・10) 実測図	1 0 2
第53図	下蒔生田畑田遺跡出土金属製品 (1~12)・石硯 (13) 実測図	1 0 3
第54図	下蒔生田筆付遺跡発掘調査区位置図	1 0 7
第55図	SA-001 実測図	1 0 8
第56図	SE-002 実測図	1 0 8
第57図	SK-003 実測図	1 0 8
第58図	SD-004 実測図	1 0 9
第59図	SK-005 実測図	1 0 9
第60図	SK-006 実測図	1 0 9
第61図	SK-008 実測図	1 1 0
第62図	SA-009 実測図	1 1 0
第63図	SK-010 実測図	1 1 0

第64図	SD-011実測図	111
第65図	SD-012実測図	111
第66図	下蒔生田筆付遺跡遺構全体図	110
第67図	下蒔生田筆付遺跡出土土器実測図(1~17)	115
第68図	下蒔生田高畔遺跡発掘調査区位置図	117
第69図	SD-001実測図	119
第70図	SK-002・SD-003実測図	119
第71図	下蒔生田高畔遺跡出土土器実測図	121
第72図	下蒔生田高畔遺跡出土土器実測図	122
第73図	下蒔生田高畔遺跡出土土器実測図	123
第74図	下六条西九反田発掘調査位置図	125
第75図	SD-001実測図	127
第76図	SD-002実測図	127
第77図	SB-003実測図	128
第78図	SB-004実測図	128
第79図	SB-005実測図	128
第80図	SK-006実測図	129
第81図	SK-007実測図	129
第82図	SK-012実測図	130
第83図	SD-013実測図	130
第84図	下六条西九反田遺跡遺構全体図	130
第85図	玉作関係遺物実測図	132
第86図	下六条西九反田遺跡出土土器実測図(1~18)	138
第87図	下六条西九反田遺跡出土土器(19~23)・須恵器(24~36)実測図	139
第88図	下六条西九反田遺跡出土須恵器実測図(37~45)	140
第89図	下六条西九反田遺跡出土須恵器(46) ・灰釉陶器(47~67)・緑釉陶器(68~72)実測図	141
第90図	下六条西九反田遺跡出土土錘実測図(1~9)	142
第91図	下六条西九反田遺跡出土土器類実測図(1~8)	143
第92図	和田神明遺跡、和田防町遺跡(第1次)調査区位置図	145
第93図	和田神明遺跡遺構分布図1	148
第94図	和田神明遺跡遺構分布図2	149
第95図	和田神明遺跡遺構実測図1	151
第96図	和田神明遺跡遺構実測図2	152

第97図	和田神明遺跡遺構実測図 3	1 5 3
第98図	和田神明遺跡遺構実測図 4	1 5 4
第99図	和田神明遺跡遺構実測図 5	1 5 4
第100図	和田神明遺跡遺構実測図 6	1 5 5
第101図	和田神明遺跡遺構出土土器実測図 1	1 5 9
第102図	和田神明遺跡遺構出土土器実測図 2	1 6 0
第103図	和田神明遺跡出土土器実測図 3	1 6 1
第104図	和田神明遺跡出土玉材実測図	1 6 4
第105図	和田神明遺跡出土石器実測図	1 6 4
第106図	和田神明遺跡出土土器実測図 4	1 6 5
第107図	和田神明遺跡出土土器製品・石製品実測図	1 6 6
第108図	和田神明遺跡出土土器実測図	1 7 7
第109図	和田神明遺跡出土越前焼実測図	1 8 0
第110図	和田神明遺跡出土越前焼実測図	1 8 2
第111図	和田神明遺跡出土瀬戸美濃系陶器実測図	1 8 5
第112図	和田神明遺跡出土磁器実測図	1 8 6
第113図	各遺構出土木製品実測図 1	1 8 8
第114図	各遺構出土木製品実測図 2	1 8 9
第115図	各遺構出土石製品実測図 1	1 9 1
第116図	各遺構出土石製品実測図 2	1 9 2
第117図	各遺構出土石製品実測図 3	1 9 2
第118図	各遺構出土銅銭拓影	1 9 3
第119図	第3トレンチ出土土製火炉蓋実測図	1 9 3
第120図	土師質小皿の分量グラフ	1 9 8
第121図	タイプ別容量比較図	1 9 9
第122図	和田防町遺跡遺構分布図	2 0 3
第123図	和田防町遺跡遺構実測図 1	2 0 4
第124図	和田防町遺跡遺構実測図 2	2 0 5
第125図	和田防町遺跡出土土器実測図 1	2 0 8
第126図	和田防町遺跡出土土器実測図 2	2 0 9
第127図	和田防町遺跡出土土器実測図 3	2 1 0
第128図	和田防町遺跡出土土器拓影図	2 1 1
第129図	和田防町遺跡出土土石製品実測図	2 1 4
第130図	和田防町遺跡出土土器実測図 4	2 1 4

第131図	和田防町遺跡第Ⅰ次調査出土土器実測図	2 2 4
第132図	和田防町遺跡第Ⅰ次調査出土土器実測図	2 2 5
第133図	和田防町調査地点及びグリッド配置図	2 3 1
第134図	SB-002 実測図	2 4 1
第135図	SB-020 実測図	2 4 2
第136図	SB-021 実測図	2 4 2
第137図	SB-022 実測図	2 4 3
第138図	SB-023 実測図	2 4 4
第139図	SB-052 実測図	2 4 4
第140図	SB-065 実測図	2 4 5
第141図	SB-015 実測図	2 4 6
第142図	SB-016 実測図	2 4 7
第143図	SB-038 実測図	2 4 7
第144図	SB-066 実測図	2 4 8
第145図	SB-067 実測図	2 4 8
第146図	SB-068 実測図	2 4 9
第147図	SA-046 実測図	2 4 9
第148図	SA-047 実測図	2 4 9
第149図	SA-048 実測図	2 5 0
第150図	SA-049 実測図	2 5 0
第151図	SA-050 実測図	2 5 0
第152図	SA-051 実測図	2 5 0
第153図	SA-054 実測図	2 5 1
第154図	SI-001 実測図	2 5 1
第155図	SI-037 実測図	2 5 1
第156図	SI-024 実測図	2 5 2
第157図	SE-008 実測図	2 5 3
第158図	SE-019 実測図	2 5 3
第159図	F地点遺構配置図	2 6 1
第160図	SD-044 実測図	2 6 2
第161図	SD-045 実測図	2 6 3
第162図	和田防町遺跡A・B地点遺構全体図	2 6 4
第163図	和田防町遺跡C地点遺構全体図	2 6 4
第164図	和田防町遺跡H・I地点遺構全体図	2 6 4

第165図	和田防町遺跡E・J・G地点遺構全体図	264
第166図	玉類実測図	269
第167図	管玉実測図	271
第168図	古墳時代の金属製品実測図	271
第169図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査SD-012出土製塩土器拓影図	273
第170図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土器に墨書された字句	275
第171図	SD-012出土土馬実測図	286
第172図	土鍾の長さとの径の相関グラフ	286
第173図	土鍾の重量と比重の相関グラフ	286
第174図	木製品実測図	289
第175図	SD-018出土鉄製録実測図	289
第176図	SX-017出土土師皿実測図	289
第177図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査SD-003出土土器実測図1(1~6)	290
第178図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土土器実測図2(7~17)	291
第179図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土土器実測図3(18~32)	292
第180図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査SD-018出土土器実測図4(33~44)	293
第181図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査SD-012出土土器実測図5(44~77)	294
第182図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査SD-012出土土器実測図6(78~103)	295
第183図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土土器実測図7(104~130)	296
第184図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土土器実測図8(131~144)	297
第185図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土瓦拓影図1(1~5)	298
第186図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土瓦拓影図2(6~10)	299
第187図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土土鍾実測図(1~69)	300
第188図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土土器実測図1(1~3)	301
第189図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土土器実測図2(4~10)	302
第190図	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土木舟実測図	303

表 目 次

	頁
第1表	SD-006及び包含層出土墨書土器一覽表 25
第2表	上蒔生田遺跡江跨地区出土土器觀察表 26~29
第3表	上蒔生田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器觀察表 29~34
第4表	上蒔生田遺跡江跨・八ヶ坪・塚町地区SD-006出土土器觀察表 ... 35・36
第5表	遺構計測表 井戸 55・56
第6表	遺構計測表 柱穴 58~63
第7表	遺構計測表 不明遺構 65~73
第8表	下蒔生田畑田遺跡出土土器觀察表 75~77
第9表	下蒔生田畑田遺跡出土石臼一覽表 84・85
第10表	火炉蓋一覽表 91
第11表	火炉身一覽表 91
第12表	下蒔生田筆付遺跡出土土器觀察表 113・114
第13表	下六条西九反田遺跡出土土器觀察表 133・134
第14表	下六条西九反田遺跡出土須恵器觀察表 134~136
第15表	下六条西九反田遺跡出土灰釉陶器觀察表 136・137
第16表	下六条西九反田遺跡出土緑釉陶器觀察表 137
第17表	下六条西九反田遺跡出土土鍾計測表 142
第18表	和田神明遺跡出土土器觀察表 167~173
第19表	和田神明遺跡出土土器觀察表 173~175
第20表	和田神明遺跡出土玉材觀察表 175
第21表	福井県における玉作り関係遺跡一覽表 196
第22表	北陸地方における石剣・石戈出土一覽表 197
第23表	和田防町遺跡出土土器觀察表(1) 215~222
第24表	和田防町遺跡出土土器觀察表(2) 222・223
第25表	和田防町遺跡第Ⅰ次調査出土須恵器觀察表 223
第26表	SD-012及び包含層出土墨書土器一覽表 276
第27表	和田防町遺跡第Ⅱ次調査出土土器觀察表 277~285
第28表	土鍾計測表 287

写真図版目次

図版 1	上叡生田遺跡 (江跨地区)	(1) 2 区 (西部) SD-001 (2) 2 区 (中央)
図版 2	上叡生田遺跡 (江跨地区)	(1) SD-002、SK-004、SK-005 2 区 (東半部) (2) 1 区 (西半部)
図版 3	上叡生田遺跡 (江跨地区)	(1) 江跨地区 SD-003 1 区 (中央) (2) 1 区 (東部)
図版 4	上叡生田遺跡 (江跨地区)	(1) SK-005 土器出土状況 (2) 1 区 遺構完掘状況 (SD-009)
図版 5	上叡生田遺跡 (八ヶ坪・塚町地区)	(1) 6・7 区 遺構完掘状況 (SD-009) (2) SK-010 遺物出土状況
図版 6	上叡生田遺跡 (八ヶ坪・塚町地区)	(1) SD-011 (上層) 遺物出土状況 (2) SD-001 (下層) 遺物出土状況
図版 7	上叡生田遺跡 (八ヶ坪・塚町地区)	(1) SD-002 (下層) 遺物出土状況 (2) SD-001 完全状況
図版 8	上叡生田遺跡 (八ヶ坪・塚町地区)	(1) SD-012 (上層) 遺物出土状況 (2) SD-012 (下層) 遺物出土状況
図版 9	上叡生田遺跡 (八ヶ坪・塚町地区)	(1) SD-002 (下層) 遺物出土状況 (2) SD-012 完全状況 III 次15区構
図版 10	上叡生田遺跡 (八ヶ坪・塚町地区)	(1) SA-013・SA-014 完全掘状況 (2) SD-006 (旧河道肩)
図版 11	上叡生田遺跡 (八ヶ坪・塚町地区)	(1) 25区旧河道肩 (2) 1 号方形周溝墓
図版 12	上叡生田遺跡 (江跨地区) 出土土器	
図版 13	上叡生田遺跡 (八ヶ坪・塚町地区) 出土土器	
図版 14	上叡生田遺跡 (八ヶ坪・塚町地区) 出土土器	
図版 15	上叡生田遺跡 (八ヶ坪・塚町地区) 出土土器	

- 図版 1 6 上蒔生田遺跡
(八ヶ坪・塚町地区) 出土土器
- 図版 1 7 上蒔生田遺跡
(八ヶ坪・塚町地区) 出土土器
- 図版 1 8 下蒔生田畑田遺跡 (1)発掘区全景(西より)
(2)D区遺構完掘状況(北より)
- 図版 1 9 下蒔生田畑田遺跡 (1)発掘区東半部全景(西より)
(2)石敷路
- 図版 2 0 下蒔生田畑田遺跡 (1)E区付近遺構完掘状況(北より)
(2)198号柱穴断面
- 図版 2 1 下蒔生田畑田遺跡 (1)501号井戸断面
(2)K溝完掘状況
- 図版 2 2 下蒔生田畑田遺跡 (1)志野筒向付出土状況
(2)六器と小把の袋出土状況
- 図版 2 3 下蒔生田畑田遺跡 (1)桶出土状況
(2)手桶出土状況
- 図版 2 4 下蒔生田畑田遺跡・遺物
- 図版 2 5 下蒔生田畑田遺跡出土土器
- 図版 2 6 下蒔生田畑田遺跡・遺物 瀬戸・美濃製陶器
- 図版 2 7 下蒔生田畑田遺跡出土磁器
- 図版 2 8 下蒔生田畑田遺跡出土遺物 (1)木製柄杓
(2)金属炭片
- 図版 2 9 下蒔生田畑田遺跡出土遺物 (1)1～5区 上層遺構完掘状況
(2)1～5区 下層遺構完掘状況
- 図版 3 0 下蒔生田筆付遺跡 (1)6～9区 全景
(2)SD-012
- 図版 3 1 下蒔生田筆付遺跡出土遺物 SK-003(1・2), SK-012(3・4・5・7・8・
10・12), 包含層(15・16・17)
- 図版 3 2 下蒔生田高坪遺跡遺構 (1)SD-001 杭列(北西より)
(2)SD-001 杭列(北より)

- 図版 3 3 下蒔生田高畔遺跡 (1)SD-002・SD-003(南東より)
(2)SK-002・SD-003(東より)
- 図版 3 4 下蒔生田高畔遺跡遺物 (1)弥生土器
(2)1～2 石鎌 3 磨製石斧
4～11 玉作関係遺物(碧玉)
- 図版 3 5 下六条西九反田遺跡遺構 (1)2～4区 上層遺構全景
(2)SB-003 柱根を残す柱穴
- 図版 3 6 下六条西九反田遺跡遺構 (1)2～4区 下層遺構全景
(2)SD-013 土師堆積状況
- 図版 3 7 下六条西九反田遺跡遺構 (1)7～10区 東部遺構完掘状況
(2)7～10区 西部遺構完掘状況
- 図版 3 8 下六条西九反田遺跡 (1)土器溜り全景
(2)土器溜り遺物出土状況
- 図版 3 9 下六条西九反田遺跡遺構 (1)土器出土状況
(2)SD-013 土器出土状況
- 図版 4 0 下六条西九反田遺跡遺物 SD-013(1～6),
2区土器溜り(9・10・11・15・20)
2区土器溜り(17・19・21・22・29・32) 3区包含層(30)
7区土器溜り(35・36) 8区土器溜り包含層(39)
- 図版 4 2 下六条西九反田遺跡遺物
- 図版 4 3 下六条西九反田遺跡遺物 1～5 砥石 6 管玉未製品 7 石鋤 8～16 土錘
- 図版 4 4 和田神明遺跡遺構一 (1)北西方より見た第1トレンチ全景
(2)西方より見た3区遺構群
- 図版 4 5 和田神明遺跡遺構二 (1)西方より見た第2トレンチ全景
(2)北東より見た5～8区遺構群
- 図版 4 6 和田神明遺跡遺構三 (1)西方より見たSK-002
(2)南方より見たSE-001
(3)西方より見た7区西部遺構群
(4)南方より見たSE-002
(5)北方より見た7区中央部・東部遺跡部
- 図版 4 7 和田神明遺跡遺構四 (1)東方より見た7区中央部遺構群
(2)北方より見た7区東部・8区西部遺構群
(3)北方より見たSK-010
(4)東方より見た8区遺構群図

図版 4 8 和田神明遺跡遺構五

(1) 西方より見た第3トレンチ全景

(2) 西方より見た16区遺構群

図版 4 9 和田神明遺跡遺構六

(1) 北方より見たSD-005

(2) 北方より見た16区東部遺構群

(3) 北方より見た17区西部遺構群

(4) 北方より見た17区中央部遺構群

(5) 南西方より見たSK-016~018

(6) 東方より見た第3トレンチ

図版 5 0 和田神明遺跡遺物

土器 SK-002 (10・28・29・31) SD-001 (51)

1丁 (58・60・61・64・83) 2丁 (84) 3丁 (88)

土錘 3丁 (1) 轆轤口 3丁 (2) 玉材 SK-002 (2)

SD-001 (6・7) 1丁 (1・3・9)

2丁 (5・8・10) 1丁周辺 (4) 磨製石剣 1丁 (11)

石杵 1丁 (12) 磨石 1丁 (13) 砥石 3丁 (3)

鋤 1丁 (5) 3丁 (4)

図版 5 1 和田神明遺跡遺物

和田神明遺跡出土土師質皿

図版 5 2 和田神明遺跡遺物

和田神明遺跡出土土師質皿

図版 5 3 和田神明遺跡遺物

和田神明遺跡出土陶磁器

図版 5 4 和田防町遺跡
第 I 次調査遺構

(1) 南方より見た1~7区遺構群

(2) 北方より見た3~8区遺構群

図版 5 5 和田防町遺跡
第 I 次調査遺構二

(1) 南東方より見たSD-008と西方ピット群

(2) 南方より見た1~3区遺跡群

(3) 南方より見たSK-002

(4) 南方より見たSD-003

(5) 南方より見たSK-005

(6) 北方より見たSK-006

図版 5 6 和田防町遺跡
第 I 次調査遺構三

(1) 南東方より見たSK-007

(2) 南西方より見たSK-008

(3) 東方より見たSK-009

(4) 南方より見たSD-007

(5) 南方より見た1・2区遺構群

(6) 南方より見たS第6トレンチ全景

図版 5 7 和田防町遺跡
第 I 次調査遺物二

土器 SD-008西方ピット (1) SK-002 (14・21)

SK-003 (26・27・36) SK-004付近 (48)

- 図版 5 8 和田遺跡第Ⅰ次調査遺物二 土器 SD-008 西方ビット (2) SK-001 (103)
SK-002 (9・93~100) SK-006 (56)
SK-007 (58・69・72) 5 T (83・101・102)
6 T 北接城 (104~113) 石畿 6 T 北接城 (1)
軽石 SK-007 (2・3)
- 図版 5 9 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) A 地点南半<北方より>
(2) A 地点北半<南方より>
- 図版 6 0 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) B 地点全景<東方より>
(2) C 地点北上層全景<南方より>
- 図版 6 1 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) C 地点南全景<北西方より>
(2) C 地点北上層全景<北方より>
- 図版 6 2 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) D 地点全景
(2) E 地点全景
- 図版 6 3 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) G 地点全景<北より>
(2) J 地点全景<南方より>
- 図版 6 4 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) SB-002<西方より>
(2) SB-020<東方より>
- 図版 6 5 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) SB-021<東方より>
(2) SB-023<西方より>
- 図版 6 6 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) SB-067<南東より>
(2) SB-068<南東より>
- 図版 6 7 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) SB-065<南西より>
(2) SB-015<南より>
- 図版 6 8 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) SB-016<北より>
(2) SB-038<西より>
- 図版 6 9 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) SD-028<南東より> 和田防町第123図 東より
- 図版 7 0 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) 柱穴列 (SA-046 049 051 048)<西方より>
(2) H 地点西半部ビット群
- 図版 7 1 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) SD-029 柱穴群 和田防町第123図 Itより
(2) I 南より見た J 地点全景
- 図版 7 2 和田防町遺跡 第Ⅱ次調査遺構 (1) SI-001
(2) SI-037

- | | | |
|--------|-------------------|---|
| 図版 7 3 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) SI-024<南東より> 和田防町 SI-024 関東より
(2) 井戸 (SE-008) |
| 図版 7 4 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) 井戸 (SE-019)
(2) 溝 (SD-003) 遺物出土状況 |
| 図版 7 5 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) SD-004・005<西方より>
(2) SD-003全景<東方より> |
| 図版 7 6 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) 溝 (SD-003) 遺物出土状況
(2) 弥生式土器出土状況 (SD-003) |
| 図版 7 7 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) SD-006<東より>
(2) SD-012 (W31・32区) <北より> |
| 図版 7 8 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) SD-012<W31・32区> <北西方より>
(2) SD-012 (SO・I) <北方より> |
| 図版 7 9 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) SD-009<東方より>
(2) SD-009 遺物出土状況 <東方より> |
| 図版 8 0 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) SD-018 西半部 <西より>
(2) SD-018 東半部 <南西より> |
| 図版 8 1 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) SD-018<西より>
(2) I26区不正円形掘り込みとSD-018 |
| 図版 8 2 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) SD-035 近景<西より>
(2) SD-035 全景<西より> |
| 図版 8 3 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) 溝 (SD-027)
(2) 溝 (SD-031) |
| 図版 8 4 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) SD-018・035・036 全景
(2) SD-018 <西より> |
| 図版 8 5 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) 円形溝 (SD-044) <南方より>
(2) 竈出土状況 (SD-044) |
| 図版 8 6 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | (1) 円形溝 (SD-045) 全景<南方より>
(2) 土師皿出土状況 (SX-017) |
| 図版 8 7 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | |
| 図版 8 8 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | |
| 図版 8 9 | 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構 | |

図版 9 0 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構

図版 9 1 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構

図版 9 2 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構

図版 9 3 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構

図版 9 4 和田防町遺跡
第Ⅱ次調査遺構

古瓦

(1)土錘

(2)土錘

砥石 敲石

1. 馬 2. 玉類 3～6. 墨書土器

7・8. 添付着須恵器

第Ⅰ章 調査に至る経緯

福井市街地の東にある六条・和田地区に計画された『県営緑農住区開発関連土地基盤整備事業』は、大型機械の導入、営農労力の節減、生産基盤の拡大、維持管理等の節減を進めて、汎用農地の確保に努め、生産性の向上と農業経営の安定を図るために計画されたものである。

圃区を300m×100m、耕区を100m×30mとし、農道幅員は、有効6mに拡張するもので、県営圃場整備事業としては、かつて無い大規模なものであった。

この計画地域には、かつて奔放に流れた足羽川の支流が形成した自然堤防上に、県内屈指の遺跡が多数確認されていた。北陸自動車道に伴う緊急調査では、この事業が実施される六条地区の上筋生田地係において縄文時代から平安時代にわたる大規模な集落跡が発見され、昭和49年、50年にかけて発掘調査が実施された。

このような地域で大規模な圃場整備事業が実施されれば、遺跡が破壊されることは明らかであり、早急に対策を講じる必要が迫られた。

しかしながら、この地域に散在する自然堤防上に遺跡が立地することは、従来から知られていたが、今まで北陸自動車道の建設に伴う遺跡分布調査で線状に調査が行われただけで、全体的には不十分であり、正確な遺跡の分布状況や実態を把握していなかった。

そのため、事業の実施に先立って計画地全域の遺跡分布調査が急がれ、昭和54年度において福井市が主体となって全域の分布調査を実施した。

その結果、土器片が散布している場所は多く、200ヶ所を優に越える地点で確認された。

昭和55年に入り、発掘調査の主体について福井市と再三にわたり協議を重ねたが、福井市としては調査の規模も大きく県営圃場整備事業でもあることから難しいとのことで、県を調査の主体として実施することになった。

調査に先立って担当部局の県農地整備課・福井耕地事務所と遺跡の保存について工法変更等の調整を重ねた。今回、圃場整備事業が実施される六条・和田地区の水田は、高低差が殆ど無く、施工も圃場の切り盛りが殆ど無かった。水路については掘削幅が5mほどで、深く遺構を削り取るために遺跡を通る水路の部分の取り扱いが調整の焦点になった。

その結果、現水田面については遺構に達するような耕作土の移動は行わない。水路の溝底を上げることは用排水路の価値が失われ、路線の変更も困難であることから、遺跡を通過する水路部分についてだけはやむを得ず調査を実施することになった。

調査にあたっては、事前に福井県教育長と福井県農林水産部長との間で、『文化財保護に関する覚書』を締結し、これによって事業を進めることになったが、調査体制の確立と調査費用の負担分について協議が難航し、冬も近い昭和55年の年も押し詰まった11月下旬から現地調査に入った。

この年の冬は『56豪雪』にあたり、厳しい寒さと深い雪を分けての発掘に難渋を極めた。(山口)

第Ⅱ章 周辺の環境

第1節 地理的環境

福井県は日本海に面し、ほぼ本州島の中央部に位置している。敦賀と今庄の間を北西から東南に走る山中峠(389m)、木ノ芽峠(628m)、柁ノ木峠(537m)を結ぶ約10kmに亘る山稜を境として本県を二つに分け、これより北東部を嶺北地区、南西部を嶺南地区としている。嶺北地区は越前の大部分を占め、嶺南地区は越前の一部と若狭を含んでいる。古代の越前と若狭の国境は、滋賀県との境にある三国山(876.3m)から北方、野坂嶺(913.5m)・三内山(521.6m)を経て、敦賀半島の西方嶺(764.1m)・蝶螺嶺(683.5m)を通り、これより西方に転じ、白木の西海岸にいたる線である。福井県の総面積は約4,255km²である。

嶺北地区の北部は、おもに白山あるいはこれより旧期の火山群の諸火山からなる加賀越前山地によって、岐阜県・滋賀県と境されている。なお、両山地は嶺北地区内の中央部に存在する越前中央山地中央部や、日本海沿岸に沿う丹生山地・南条山地に接している。九頭竜川・足羽川・日野川の諸河川はこれらの山地を流れ、九頭竜川の中流に勝山・大野の諸盆地を、日野川の中流には武生・鯖江盆地を有する。これらの3河川は下流で、それぞれ相合して九頭竜川となり、三里浜砂丘の北端で日本海に注いでいる。九頭竜川の下流には本県最大の福井平野(坂井平野)が展開する。

嶺南地区は若狭湾に面し、京都府・滋賀県とは北東に延びる丹波紅顔の屈曲の多い山嶺によって境され、全体として凹弧を北向きにする三日月形を呈する。若狭湾は、日本海に面する数少ない湾入の一つであり、湾岸は典型的なリアス式海岸を示している。従って、海岸は一般に平地に乏しく、敦賀湾頭にやや広い敦賀平野を擁するに過ぎない。この地区の東半は、琵琶湖・伊勢湾を結ぶ本州島地狭部に当たり、多数の断層によって攪乱された破砕帯である。主な河川としては小浜湾に注ぐ北川・南川を挙げることができる。

福井県の地形は次のように地形区分される。

福井県の地形区

- A 嶺北地区
 - 1 加賀越前山地
 - 2 美濃越前山地
 - 3 越前中央山地
 - 4 南条山地
 - 5 丹生山地
 - 6 加越台地
 - 7 越前海岸
 - 8 大野・勝山盆地
 - 9 福武低地(福井・武生を結ぶ低地)



第1図 福井県地形区図

- B 嶺南地区 10 若越破砕帯
11 若丹山地
12 若狭湾沿岸

福井平野は県の北部に位置し、東西の幅員約10km、南北の長さ約20kmの地域を占めている。西部は丹生山地と、その北端から北北東方向に続く三里浜砂丘があって、日本海に接する。北部には加越台地、東部には九頭竜川を挟んで、その北部に加賀越前山地、南部に越前中央山地が崛起している。福井平野の南部には、足羽山(116.4m)・八幡山(135m)・城山(202.2m)等の大小の孤立丘が散在し、東は大土呂の狭隘部、西は清水山(67.0m)と真栗を結ぶ線で鯖武盆地に連なっている。福井平野のほぼ中央を西流する九頭竜川は県下第一の長い河川(延長115.8km)で、遠く岐阜県境油坂峠付近に源を発し、奥越の山々を縫い、松岡付近で平野に出る。越前中央

山地に源を発する足羽川は山地間を蛇行しながら天神に至って平野にで、北西に流れて、丹生山地の山麓下の下付付近で日野川に合流する。日野川はこれから丹生山地東麓に流路を取りつつ、北橋原付近で、先の九頭竜川に注いでいる。これより、九頭竜川は北流して旧三国町付近で竹田川を合わせ、間もなく三里浜砂丘の北端を経て日本海に注ぐ。竹田川は加賀越前山地の浄法寺山(1,053m)付近に源を発し、川上付近で福井平野に出て、加賀越前山地あるいは加越台地に近い最も低い地域を縫って、北西から東西方向に流路を転換して旧三国町に達する。これらの九頭竜川・足羽川・竹田川の3河川はいずれも、東部山地から福井平野に出るところで、微弱的な扇状地地形を示している。福井平野を構成する第四系の堆積基盤岩の深度については、足羽山・平岡山・丸山(55.7m)の孤立丘をつなぐ地帯で、これを更に東に追跡すると、京福勝山線の追分駅に近い原メートルの裏山(168.5m)に続く形勢を示している。足羽山は安山岩と角礫凝灰岩からなり、平岡山・丸山・原目の裏山は前者の下位に当たるプロピライトからなる。この地帯に含まれる福井駅ビルの採井資料では深度93mでプロピライトに当たっている。基盤岩のこの隆起帯は第四系の地下水を九頭竜川地下水系と足羽川地下水系に二分しており、第四系の分布を考察する上に見逃してはならない部分である。足羽川流域には福井市水道局の水源井が多数あるが、第四系の堆積基盤岩深度は板垣5号井では約140m、一本木井では約115m、板垣4号井では約194mの深度に達するものも基盤岩に当たっていない。九頭竜川流域に当たる兵庫川に沿う旧木部村東荒井井では、天然ガス調査のため深度250mに達する井戸を掘削したことがある。この井戸は、深度243mで新第三紀層に属する凝灰質泥岩に当たった。これは今日までに知られた基盤岩の最大深度である。一方、山岸の西方約1km、三里浜砂丘内で三国上水道源井を掘削したところ、深度146mでこれまた新第三紀に属する凝灰質砂岩に到達した。このことは、第四紀の初期における堆積過程を考えるうえで重要なことである。ともあれ、これらのことから、福井平野第四系の堆積基底はかなり起伏に富んでいるものと見られる。(1969年福井県刊行の福井県地質図幅説明書から引用)

遺跡のある福井市六条・和田地区は、福井平野の南端に位置し、背後には文珠山・成願寺山がある。足羽川が福井平野に出て川幅を広げ、沖積地を幾筋も奔流して形成した自然堤防は、低湿な沖積平野に於ける良好な宅地として古くからの集落が立地している。このような宅地周辺の自然堤防は徐々に削平されて水田に変換されていった。このような自然堤防上に立地していたのが六条・和田遺跡群である。

足羽川左岸の福井市上叡生田町・下叡生田町・下六条町には上叡生田遺跡江跨・ハケ坪・塚町地区、下叡生田畑田遺跡、下叡生田筆付遺跡、下叡生田高畔遺跡、下六条西九反田遺跡があり、足羽川右岸の福井市和田中町には和田神明遺跡、和田防町遺跡がある。

近年顕著になった人口の都市集中は、これらの自然堤防上に立地した宅地だけでは需要を賄い切れず、低湿な水田を埋め立てて市街地が膨張して宅地化が進められてきた。このために旧地形は徐々に変更されて、福井平野の自然地形を見ることが出来なくなるのは遠い将来の事ではないであろう。

(山口)

第2節 歴史的環境

六条・和田遺跡群は福井市上筋生田町・下筋生田町・大町・和田中町にある。

福井市は、北は坂井郡、東は吉田郡・足羽郡、南は鯖江市、西は丹生郡などに接し、日野川・九頭龍川・足羽川などの諸河川によって形成された福井平野の南部に所在する。福井平野は、東西幅10Km余りで南北に延びているのであるが、その地勢は東より西に向かって緩やかに傾斜している。そのため、平野南部を西流する足羽川は、越前中央山地から流出した後、南北両域に扇状地や自然堤防を形成する。六条・和田遺跡群は、この足羽川両岸の自然堤防上に存在する。

以下、各時代ごとに周辺の遺跡を記述する。

A 縄文時代

遺跡の分布が希薄であると見なされていた沖積平野中においても、後代の遺跡の下層に縄文時代の包含層が存する場合がままあり、北畑貝塚のような存在を時間的・空間的に特異な例と考えることは、もはや困難な状況になってきている。

以下、六条・和田遺跡群の周辺に存する諸遺跡について略述したい。

当地において、古くより知られてきた先史時代遺跡の一つに吉田郡永平寺町鳴鹿山鹿遺跡があり、大野雲外・上田三平両氏により各々報告されている。本遺跡は、越前中央山地を西流して来た九頭龍川が形成した右岸の低位河岸段丘上に立地したと考えられているが、古く用水工事により偶然発見されたもので、層位関係・伴出遺物については不明である。今日、有舌尖頭器22個、石核2個、大形尖頭器1個、局部磨製石斧1個が確認されているが、耕地整理のために遺跡の旧形は失われたともいわれ、その実態は不明のままである。しかし、旧来より広く知られた遺跡であり、精緻かつ多量の有舌尖頭器の一括出土も相まって、草創期における極めて重要な遺跡の一つであるといえる。(木下) 昭和61・62年に鳴鹿山鹿遺跡の東に隣接した地で県道の着け替え工事があり、鳴鹿手島遺跡が発見されて調査された。詳細については整理中であるために不明であるが後期の良好な資料が豊富に得られている。

(山口)

九頭龍川は福井沖積平野に流入するさい、吉田郡松岡町付近より緩やかな扇状地形を形成する。この左扇状、福井市林町の水田中に林遺跡が立地する。この扇状地上には弥生時代以降の遺跡も点在しているが、本遺跡は、地元在住の楠幸家氏の丹念な表面採集活動によって、越前における晩期の大洞式系遺跡として著名である。出土遺物には、土器以外には打製石斧等の石器類、土製品、石製品等該期特有の多彩なものがあるが、とりわけ多数の石鏃と猪形土製品の出土が目される。

足羽川が福井平野に流入するさい右岸山麓に形成する緩斜面ないし段丘上に、福井市篠尾町新溜・天神両遺跡が立地する。

篠尾町は北方の谷奥から流出する小河川により形成された扇状地上に所在する。この扇状地には洪積丘陵が埋没しているが、扇央部において一部露頭している。この部分に新溜遺跡は立地する。昭和37年(1962)新溜古墳が土取りされたさい、封土下断面に縄文時代の遺物包含層が露出

し、遺跡は発見された。本遺跡からは前期末から中期前葉の土器片、石器（打欠石鍾）等が出土している。

足羽川が福井平野に流入するところに形成された河岸段丘は、前述した新福遺跡付近から連続する埋没丘陵に隣接している。この段丘上に天神遺跡は位置する。本遺跡から中期の障縁を半葎竹管により施す土器片を採集している。そのほか、本遺跡から出土した遺物に関する報告がある。昭和16年には福井市によって同地域の天神山古墳が調査され、同時に中期の土器と炉跡を検しているが、詳細については整理中であるために不明である。

福井平野を流れる足羽川の左岸は、和田地区遺跡群の占地する右岸方に対し比較的低位で現集落もさほど整列しない。

足羽川の右岸の水田中に福井市曾万布町曾万布遺跡、同左岸の水田中に福井市上河北町・上蒔田町上蒔生田遺跡、その南方山麓に福井市二上町・半田町糞置遺跡が立地する。

福井平野内において足羽川は右岸に自然堤防を形成するのにに対し、左岸側では乱流してところどころに微高地を残存させる。この微高地上に上蒔生田遺跡は立地している。当初、本遺跡は弥生時代以降の所産であると想定されていたが、昭和49・50年（1974・75）の北陸自動車道建設関連の調査により、弥生時代遺物包含層の約2m下層、間層に青灰色粘質土層を挟んで縄文時代遺物包含層が検出された。当地において未だ僅少例である縄文時代後期の低地遺跡として注目されよう。本遺跡からは土器、石器以外に石製挾状耳飾、耳栓等が出土しており、後期の堀之内2式併行期を中心に存続したと見られる。

足羽川の右岸の自然堤防上には曾万布遺跡がある。本遺跡は北陸自動車道の建設に関連して昭和47・48年に調査が実施され、古墳時代初頭から中世にかけての遺構とともに多量の遺物が出土し、その下層から土壇等の遺構とともに後期の良好な資料が出土している。

足羽川左岸の低地に広がる水田中の更に南方山麓、江端川を臨む微高地上に糞置遺跡は立地している。曾万布・上河北両遺跡と同様に北陸自動車道建設に関連して昭和48・49年（1973・74）に調査が実施された。当遺跡は本来東大寺荘園跡の調査を主眼として実施されたが、むしろ前代の遺構、遺物が多数検出された。その最下層において晩期後半代に比定し得る土器片が若干出土し、該地における空白期を充填するものとして着目された。

（木下）

B 弥生時代

福井平野東部における弥生時代の遺跡としては、福井市曾万布遺跡、同市荒木遺跡、同市林遺跡、同市上河北遺跡をまず挙げることができる。

荒木遺跡は、和田防町遺跡の東南東方約800mの、足羽川右岸の自然堤防上に所在する。本遺跡は、昭和43年（1968）に福井考古学会によって発掘調査された。その結果、古墳時代前期の竪穴式住居2棟をはじめ、溝・貯蔵穴などから、土師器、結晶質緑色凝灰岩の原石・破片、同管玉の未・完成品など多くのいわゆる玉作り関係遺物が出土したが、それだけに止まらず弥生時代中・後期の土器多数も出土した。なお、これらの弥生土器をもとにした荒木Ⅰ―Ⅲ式の編年は、

現在も越前地方における弥生土器編年の基準をなしている。

一方、林遺跡では、前述のように縄文時代の遺物も出土している。本遺跡は、昭和35年(1960)に明治大学によって発掘調査され、溝などから弥生時代後期から古墳時代前期におよぶ多数の土器が出土した。ちなみに、これらの土器による林Ⅰ～Ⅲ式の編年は、主に越前の土師器編年の基準をなしている。

北陸自動車道建設に伴って実施された一連の調査で、上河北遺跡、糞置遺跡、ならびに、福井市帆谷町太田山墳墓群が発掘され、弥生時代遺構・遺物の存在が明らかになった。前3者については既に取り挙げたが、ここでは弥生時代の遺構・遺物についてのみ説明する。

まず、上河北遺跡は、弥生時代中期の方形周溝墓2基をはじめ、時期不詳の方形周溝墓5基など、弥生土器・石器各若干が出土した。

次に、糞置遺跡は、弥生時代中期の土壇墓45基、壺棺墓1基、中～後期の土壇墓10基、環状土壇群1箇所、後期の土壇(土壇墓を含む)21基、環状土壇1箇所、方形周溝1基が検出された。出土品は多岐にわたるが、まずなによりも豊富な土器量を上げることができる。それらは唐古第Ⅱ～Ⅴ様式(以下、本報告では唐古を省略する)に並行し、越前地方における全期間を通した弥生土器編年が可能である。そのほか、石器には石鏃・磨製石剣・石庖丁・石鍬・扁平片刃石斧など、木器には弓・鍬・梯子などそれぞれ多数が出土した。

さらに、太田山古墳群は、文殊山から北方に派生する丘陵上に分布し、総数約70基の弥生～古墳時代の墳墓からなる。

昭和49年に福井県教育庁文化課が緊急発掘を実施し、古墳時代の墳墓群に混在する形で、弥生時代中期の方形台状墓2基が検出された。太田山1号墓(辺長約19m)では、墳頂部で土壇1基が、墳丘の内外で供献土器7個が出土した。同2号墓(辺長約23m)は、1号墓に南接し、墳頂部の土壇1基から小型管玉501個が出土した。本墳墓群の調査によって、北陸地方でも既に第Ⅲ様式期に大型の方形台状墓が築かれていることが初めて明らかになった。そのほか、福井市木田遺跡は古墳時代を中心とする集落遺跡であるが、福井市教育委員会の多年にわたる調査によって、弥生土器若干が出土している。

なお、曾万布遺跡の発掘に伴って、周辺域の遺跡の分布調査が実施され、弥生時代中期の福井市下中遺跡や同市北今泉遺跡の存在を確認した。いずれも第Ⅳ様式期に属す。(中司)

C 古墳時代

縄文・弥生両時代に比べて、古墳時代の遺跡の確認数はきわめて多い。ただ、その大部分は集落遺跡ではなく古墳である。しかも、既に判明している古墳時代の集落遺跡は、先に弥生時代で説明した荒木・林・上河北・糞置・木田各遺跡と曾万布遺跡にとどまる。そこで、ここでは集落遺跡の再説を避け、古墳時代の動静を端的に現していると思える周辺の各古墳群と、それぞれの群内の主要な古墳を記述することにしたい。もともと、調査を経た古墳の数はあまりにも多いので、できる限り顕著な古墳のみをとりあげ、略述する。

さて、今対象とする福井平野東部域の丘陵地帯には、松岡・酒生・御茸山の3古墳群がある。

松岡古墳群は、九頭龍川左岸の原目山・重立山・松岡丘陵などに分布する。本古墳群は総数132基を数える。群内の各古墳は上述の所在丘陵によって主に3支群に分けうる。

原目山支群は、福井市原目町・堅達町の丘陵上に分布する。本支群は、これまで前方後円墳1基を含む総数45基からなる古墳群として知られてきた。しかし、今回改めて分布調査を実施した結果、方形・円形のみからなり、しかも総数は消滅墳を含めて69基前後を数えることが判明した(第7図)。本支群では、昭和41年(1966)に上水道建設に伴い原目山1～5号丘が緊急調査された。そのうち、原目山1・2号丘は古墳時代前期の方形台状墓であり、同3号丘は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓3基と、土壇墓13基が存在する自然丘陵であることなどが判明した。原目山1号丘(辺長約20m)では、土壇1基から鉄刀2口、管玉325個、ガラス小玉728個が、墳丘から供献土器若干が出土した。また、同2号丘(辺長約30m)では、土壇5基から鉄剣2口、銅鐙1本、素環頭鉄刀1口などが、各土壇上から供献土器若干が出土した。なお、本支群では昭和45、47・48年(1970、1972・73)にも、同37～39号丘が発掘された。

重立山支群は、原目山に東接する福井市重立町・吉田郡松岡町吉野の丘陵上に分布する。本支群は総数19基を数える。そのうち重立山1～5号墳が、原目山37～39号丘とともに緊急発掘された。そのほか本支群には、三角山古墳・重立山16号墳などの前方後円墳(全長40～60m)があるが、ともに群内の盟主墳である。

松岡支群は、松岡町吉野郷から同町志比掣にかかる丘陵上、あるいは河岸段丘上に分布する。本支群は総数38基を数える。丘陵先端部には、大型前方後円墳(全長約128m)で段築・葺石・埴輪を有する手繰ヶ城山古墳がある。また、その南方の稜線上にはやはり大型前方後円墳(全長約85m)で埴輪をそなえる石舟山古墳がある。昭和47年(1972)の調査で、埋葬施設の舟形石棺1基が検出された。さらにその南方の山頂には、同様に大型前方後円墳(全長約90m)で埴輪をそなえる二本松山古墳がある。埋葬施設として、南北に各1基の舟形石棺が検出された。享保年間(1716～35)に、1号石棺から人骨・朱・勾玉・甲冑類などが出土し、また明治39年(1906)には、2号棺から仿製四神四獣鏡1面、金銅冠1個、鍬銀冠1個、眉庇付冑1領、三角板紙短剣甲1領などが出土した。

そして、松岡丘陵の山麓部には、円墳(径約20m)の春日山古墳がある。昭和28年(1953)に、横穴式石室から横門式舟形石棺1基と鉄刀1口、鉄鉾1本、鉄地金銅張鏡板付簪1個などが出土した。その西方に延びる河岸段丘上には大型前方後円墳(復原長約100m)で葺石・埴輪をそなえる泰遠寺山古墳がある。埋葬施設の舟形石棺1基から中国製半円方形帯神獸鏡1面、仿製内行花文鏡1面、勾玉5個、トンボ玉2個などが出土した。

以上が松岡支群内の主要古墳であるが、そのほかにも三峯山古墳・鳥越古墳・稲荷山古墳などの、より小型の前方後円墳(全長50～60m)がある。本支群では段築・葺石・埴輪などの外部施設を完備、あるいは、その一部をそなえ、埋葬施設として舟形石棺を持つ大型前方後円墳の存在

がきわめて特異といえる。

なお近年、松岡古墳群と九頭龍川を挟んだ対岸の、坂井郡丸岡町六呂瀬から山崎三ヶの丘陵上には、やはり大型前方後円墳（全長約 140m）の六呂瀬山 1 号墳など、総数約 130 基の古墳からなる丸岡古墳群があることが判明した。

次に酒生古墳群は、足羽川右岸の成願寺丘陵や篠尾の山麓部に分布する。本古墳群は、昭和 48 年の分布調査によって総数 171 基からなると報告されたが、今回県が再調査したところ 323 基を数えることが判明した。群内の各古墳は上述の所在地によって主に 2 支群に大別しうる。

成願寺支群は、福井市成願寺町から同市篠尾町にかかる丘陵上に分布する。本支群は総数 132 基を数える。既調査墳は存在しないが、丘陵先端部に前方後円墳（全長約 47m）の酒生 13 号墳が、その東方のより高所に前方後方形（全長約 31m）をなす同 30 号墳がある。中世の城砦の構築のためか墳形の確定の困難な古墳が多く、顕著な古墳の基数が少ないなど、なお不詳な点が多い。ともあれ、酒生 13 号墳は群内の盟主墳である。

篠尾支群は、福井市篠尾町・高尾町の山麓部に分布する。本支群は総数 191 基を数える。篠尾扇状地の扇央部には円墳（径約 20m）の新溜古墳がある。昭和 37 年（1962）、土砂採取に伴って舟形石棺 1 基から人骨 5・6 体、銅鏡 1 面、ヒスイ勾玉 1 個などが出土した。そのほか、新溜古墳南方の飯塚古墳（円墳、径約 43m）、北方の孤山古墳（円墳、径約 26m）、車塚古墳（墳形・規模不明）、おかま古墳（墳形・規模不明）、御廟古墳（方墳、辺長約 12m）などが、いずれも群内の盟主墳である。

また、御茸山古墳群は、酒生古墳群と足羽川を挟んだ対岸の御茸山丘陵やその西麓部に分布する。本古墳群は総数 154 基を数える。群内の各古墳はやはり 2 支群に大別しうる。

御茸支群は、福井市脇三ヶ町・城戸内町の丘陵上に分布する。本支群は総数 104 基を数える。丘陵先端部に前方後円墳（全長約 70m）の御茸山 40 号墳が、その南方に前方後方墳（全長約 43m）の同 44 号墳が、さらに南方の最高所に前方後円墳（全長約 45m）の同 66 号墳（鉢伏山古墳）がある。これらはいずれも群内の盟主墳である。

仙脇支群は、福井市仙脇町の山麓に分布する。本支群は総数 50 基を数える。山麓西端部に前方後円墳（全長約 21m）の御茸山 106 号墳と、やはり前方後円墳（復原長約 23m）の同 127 号墳がある。この 2 基も群内の盟主墳である。そのほか、昭和 50 年（1975）に福井市教育委員会が宅地造成に伴って、群内の小円墳 4 基を緊急発掘した。

以上が福井平野東部の古墳群である。述べてきた各古墳を、墳形・埋葬施設・副葬品など判明している事実をもとに編年すれば、概ね次のようなことがいえる。

まず酒生古墳群においては成願寺支群（前・中期）→篠尾支群（後期）、御茸山古墳群においては御茸山支群（前・中期）→仙脇支群（後期）、というように墓域と盟主墳とが変遷している。つまり、古墳群の形成は、基本的には一系列である。ところが、松岡古墳群においては、主に原目山支群（前期）→重立山支群（中期）→松岡支群（後期）というように墓域と盟主墳とが変遷

しているのだが、それと並行して松岡支群内においても独自に前・中期にかけて定式化したきわめて大型の古墳が造営されており、首長墓が重層的に営まれている。

したがって、松岡支群に存在する大型前方後円墳は、いくつかの地域集団によって推戴された地域連合の大首長墓と考えてまちがいないまい。また、丸岡古墳群にも同様な大型古墳が存在する事実は、そうした大首長が松岡・丸岡両地域集団から交互に輩出したことを示しており、その動態に双方の首長の勢威の盛衰を見ることができる。なお、こうした大首長墓は、福井市足羽山で産出する凝灰岩（笏谷石）製の舟形石棺を内蔵しているので、地域連合の範囲が平野中央部に所在する足羽山古墳群までおよぶことは確かといえよう。

ところで、これらの各古墳群は大河川流域の丘陵上に所在するが、それぞれの河川に沿って自然堤防が発達しているので、各古墳群を造営した地域集団の基盤となる領域もおのずから想定することができる。改めて曾万布遺跡をとりあげれば、本遺跡は足羽川右岸の自然堤防上に位置しており、必然的に酒生古墳群を営んだ酒生地域集団に属していたものと思う。（中司）

D 奈良～室町時代

律令期以降の遺跡は、未だ調査数が極めて少ないので一括して記述する。

この時期の調査遺跡としては、福井市篠尾町篠尾庵寺跡がある。

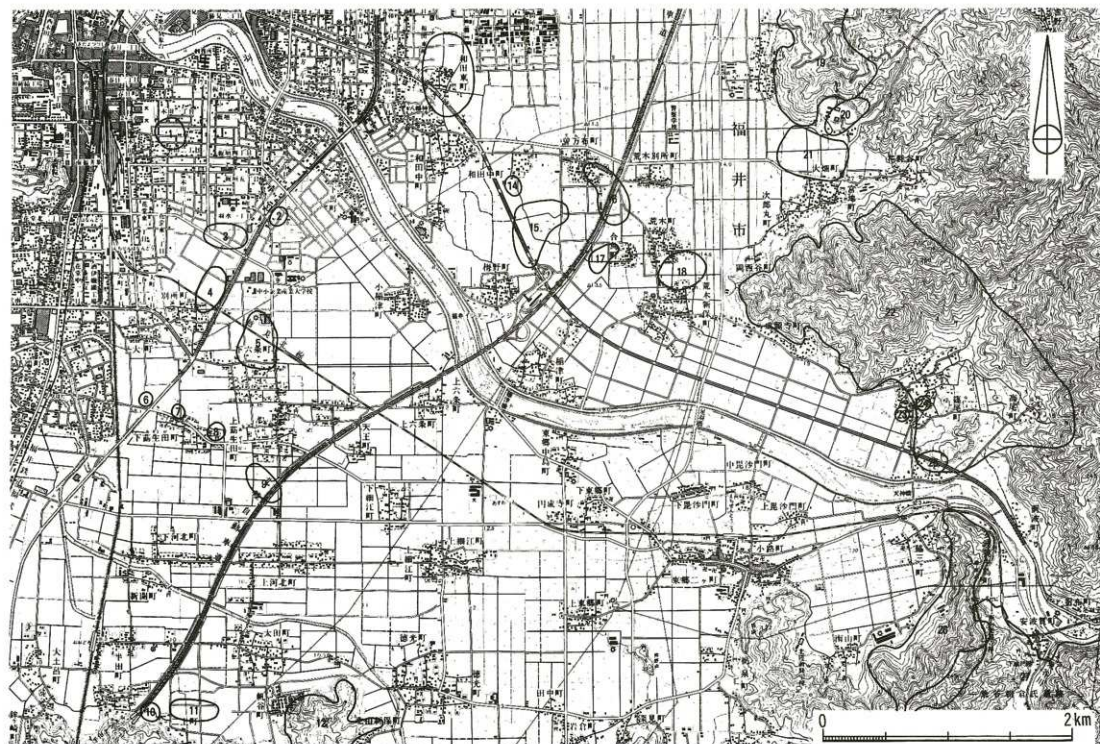
篠尾庵寺跡は、篠尾扇状地の扇端部に所在する。本遺跡は、昭和46年（1971）圃場整備事業に伴って、福井県教育委員会が緊急発掘を実施した。その結果、塔（辺長12.1m）の基壇と心礎、その他の礎石などが検出された。出土品には、須恵器・瓦・鐘鈴型などがある。

当寺は、白鳳期に創建され、奈良時代まで存続したものである。前述のように、この寺の背後の丘陵部には酒生古墳群があるので、古墳群を営んだ集団の後裔氏族が氏寺として造営したものとする説がある。そのほか、今回の分布調査で、新たに福井市寮C遺跡、同市東今泉遺跡、同市大畑遺跡、同市成願寺遺跡などを確認した。いずれも須恵器片の出土であるが、寮C遺跡では布目瓦をも含む。7世紀に遡るが南東方には東山公園墓地窯跡があり、本遺跡もその立地からみて窯跡であろうか。なお、福井市下中・河増・和田東・神明の各町内でも須恵器片少量が出土している。

鎌倉・室町時代の遺跡としては、まず福井市城戸内町一乗谷朝倉氏遺跡を取り上げるべきであろう。本遺跡は、いまさらいうまでもなく、戦国大名朝倉氏の居館跡を中心とする城下町である。ただし、あまりにも著名な遺跡であり、ここでは省略する。

山城・砦と考えられる遺跡としては、酒生古墳群内で2箇所を確認した。また周知の遺跡であるが、福井市小安町嶺山城跡がある。

一方、集落跡は福井市下中・大畑・成願寺の各遺跡で遺物が出土している。また、曾万布町内だけではなく、その東方の荒木別所・次郎丸・宮地・花野谷の各町内に、凝灰岩製の一石瓦輪塔がある。したがって、これらの町内では現集落と重複する形で、室町時代の集落跡があるのである。（中司）



- 1 木田道跡
- 2 下馬A道跡
- 3 下馬B道跡
- 4 別所道跡
- 5 下六桑道跡
- 6 下馬生田高峠道跡
- 7 下馬生田平付道跡
- 8 F馬生田畑出道跡
- 9 上馬生田道跡
- 10 糞置道跡
- 11 二上道跡
- 12 太田山古墳群
- 13 和田家道跡
- 14 和田神明道跡
- 15 和田防町道跡
- 16 曾方布道跡
- 17 寄安道跡
- 18 荒木道跡
- 19 河水古墳群
- 20 大畑古墳群
- 21 大畑道跡
- 22 酒生古墳群
- 23 篠尾庵寺跡
- 24 新留道跡
- 25 天神道跡
- 26 御耳山古墳群
- 27 一乗谷朝倉氏道跡

第2図 周辺の主要道跡分布図

第三章 上筋生田遺跡

江跨・八ヶ坪・塚町地区

第1節 調査経過

1 調査概要

福井市上筋生田町江跨・八ヶ坪・塚町にある。

福井市街地の南にある上筋生田町は天王町と下六条町と共に六条地区では大きな集落を形成し、この南に上筋生田遺跡は位置している。

今回調査を実施した江跨・八ヶ坪・塚町地区は、上筋生田町の集落のさらに南にあり、上河北町の地籍と隣接している。

江跨地区での調査は、東から西に流れる江橋場排水路の北隣に接する江橋場排水路の付け替え用地を調査の対象とした。調査地内には、二ヶ所に構造物(橋梁)が設置されることになっており、これらの部分については、掘削幅が大きくなるので調査区の幅も広げることにした。

調査区の設定は、東西に長い調査地を6区に分けて東から1～6区とし、3区と6区を構造物が設置される部分にあてた。1・2区は、南北幅4.5m、東西42m、3区が南北6.5m、東西6.5m、4・5区が南北幅2.0m、東西30m、6区が南北7.0m、東西7.0mで、長さは東西に約90mに及んでいる。3区と6区の幅が広いのは、新しい水路にかかる橋のためである。4・5区は、自然の旧河道であることが3区と6区の調査結果から判明したため土砂の堆積状態を把握する目的で試掘溝を設けたところである。終了後の調査区は、340.25㎡であった。

八ヶ坪・塚町地区での調査は、東から西に流れる排水路とこれに斜交する排水路の予定地を調査の対象とした。調査地は、江跨地区の南210mに江橋場排水とほぼ平行して東西に長さ210m、幅3.0mと、北陸自動車道の西の側道に平行した長さ60m、幅2.0mで、西端から10m毎に調査区を設定した。調査区は西端から10m毎に1～9区を設け、10・11区の12区の東端を残す大半には従前の水路があり、調査が不可能であった。13～20区まではやはり、10m毎に設定した。21区は、従前の水路にかかっており、調査が不可能であった。22～27区も同様に設定した。これらは従前の南に隣接してある水路にかわる水路用地である。

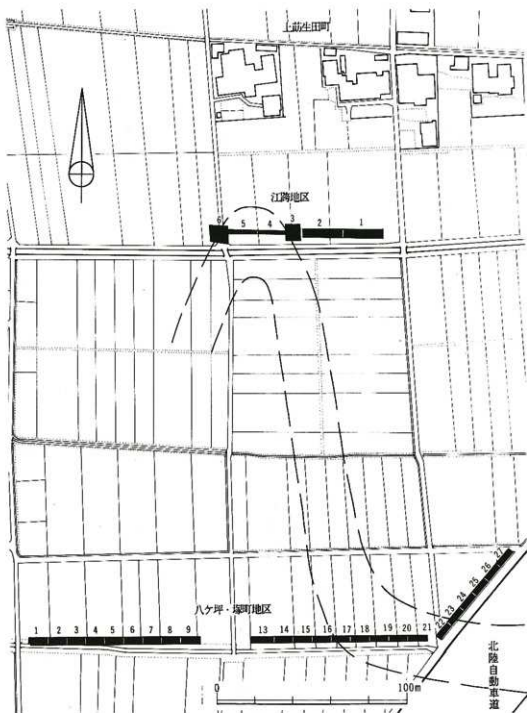
終了後の調査区は、6・7区と16区で遺構の検出のため幅を拡張したため、701.5㎡であった。

調査は、構造物の養生期間が必要である江跨地区から着手するよう福井耕地事務所から要望があり、優先して江跨地区の調査から開始することになった。

文化課は夏季から調査の実施を計画していたが、事前の調整が遅れ、現地に入れたのは11月25日になってからであった。

この冬は「56豪雪」の年にあたり、調査は困難を極めた。

(山口)



第3図 上野生田道路発掘調査位置図

2 調査日誌抄

1980 (昭和55) 年

- 11月25日 本日より江崎地区での現場調査を開始した。重機による表土の除去を3・6区の構造物設置予定地で実施し、テントの設営をした。表土の除去のすんだ部分から精査に入り、黒書された須恵器を発見した。これらに記された字句は「北家」・「三」等があり、上蒔生田遺跡第Ⅰ次調査（北陸自動車道関係で調査した上河北遺跡を指す）の旧河道で発見された字句とおなじものもあった。
- 11月26日 3・6区ともに表土（耕作土）・床土を除去して遺構面を覆う黒褐色粘質土と暗褐色土の精査に入り、多量の土器片が出土した。
- 11月29日 暗褐色土を除去し遺構面を検出した。3区では遺構面は、自然の起伏が激しいが、幅が調査区外まで広がっている溝（SD-006）と土壌を検出した。6区でも黒褐色粘質土の直下から同様に幅の広い溝（SD-006）を検出した。
- 12月01日 土壌の埋没土は、暗褐色土と漆黒色粘質土で、溝（SD-006）の埋没土は、黒褐色粘質土と暗青灰色粘土・遺物を多量に包含した砂混じりの暗青灰色粘土・ビート混じり砂・遺物と植物遺存体を多量に包含した暗青灰色粘土・ビートと検出したが溝の底までは達していない。3・6区で検出した溝（SD-006）から出土する遺物は、平安時代に属するものが多いと思われた。
- 12月03日 3・6区の写真撮影と写真測量を行い、位置図を作る。
1・2区と4・5区も本日から開始した。重機で表土を除去して1・2区の暗褐色土の精査に着手し、4・5区も旧河道（SD-006）内の堆積状態の調査に入った。
- 12月05日 1・2区で暗褐色土を掘り下げて遺構面に達し、複雑に入り組んだ遺構を検出した。
- 12月08日 1・2区で遺構を把握するため精査を行った結果、多くの遺物が出土した。
- 12月09日 1・2区の遺構のプランが確認された土壌と、溝3条を西からSD-001・SD-002・SD-003として遺構の掘り下げを開始した。
- 12月11日 SD-002を掘り下げていく過程で溝の底からSK-004・SK-005の土壌を検出した。
- 12月17日 1・2区の土壌・溝等の掘り下げをすべて終了した。
- 12月18日 1・2区の写真撮影と遺物の取り上げを終了した。
- 12月19日 1・2区の平面図・断面図作成を終了し、4・5区の堆積状態の調査に着手した。
- 2月22日 4・5区の掘り下げを終了して写真撮影と断面図を作成した。
- 12月23日 すでに雪は調査を続行することを不可能にした。八ヶ坪・塚町地区については、積雪が落ち着くのを待つことにして一時撤退のやむなきに至った。

1981 (昭和57) 年

降雪の落ち着くのを待っていたが調査期間を考慮すると、1 m 近くある積雪を除いてでも着手せざる得ない状況となり、のこる八ヶ坪・塚町地区で調査を再開することにした。

3月11日 八ヶ坪・塚町地区の現場調査を本日より開始し、重機による表土除去を開始した。

3月13日 表土の除去が終了し、発掘区を設定した。表土除去後、精査に入り6・7区で、暗褐色土が埋没土の溝状遺構2条 (SD-008・SD-009) と不定形の落ち込みを検出した。

3月17日 掘り下げが終了した6・7区と写真撮影・平面図作成と遺物の取り上げが終了し、1～9区間ですべて終了した。11～21区に着手し、溝状遺構5条・不定形落ち込み1基を確認した。

3月18日 13区で検出した不定形落ち込み (SK-010) は、掘り下げが終了し、14区で検出した溝状遺構 (SD-011)、15区で検出した溝状遺構 (SD-012)、16区で検出した溝状遺構2条 (SD-013・SD-014)、17区で検出した溝状遺構 (SD-006) の掘り下げを開始した。

3月19日 16区の溝状遺構2条 (SD-013・SD-014) の暗褐色土を掘り下げた結果、溝底に柱穴が等間隔に並び、2条の連結ピットであった。

3月20日 13区的不定形土塊 (SK-010) の写真撮影・平面図作成と16区の連結ピット2条 (SD-013・SD-014) の写真撮影・平面図作成を終了した。

3月24日 22～27区で検出した26・27区にかかる長い浅皿状の溝 (上萌生田遺跡第I次調査で検出した1号方形周溝) とこの溝の北にある土塊 (SK-016) の写真撮影を終了した。

3月27日 25区で検出した16区東端から25区南までにわたる旧河道 (SD-006) の写真撮影を終了した。

3月28日 25～27区の平面図と断面図を作成した。

3月31日 14区溝 (SD-011)、15区溝 (SD-012)、16区東端で肩口を検出した旧河道 (SD-006) の掘り下げが終了した。これらの遺構を検出した暗褐色土の埋没土の下層にはさらに2～3層の埋没土があり、旧河道では江跨地区の旧河道と同様であった。

4月01日 14～16区までで検出した溝と旧河道を清掃後に写真撮影を終了した。

4月03日 14～16区までで検出した溝と旧河道の平面図・断面図の作成を終了し、現場作業を終了した。

「56豪雪」と言うアクシデントに遭遇したものの無事に調査を終了したことは、関係者各位の協力によるところが大きく深く謝意を表すところである。 (山口)

第2節 遺構

1 遺跡概説

上蒔生田遺跡江跨・ハケ坪・塚町地区は、昭和49・50年に実施した北陸自動車道の建設に伴う関連遺跡の調査で発掘された上蒔生田遺跡第Ⅰ次調査（上河北遺跡）の北西に隣接した水田で、前回の調査で検出した遺構の延長を検出することにもなった。2箇所に離れた地区での調査ではあったが、近接した地区であり、同一の遺跡内での調査であったので、基本的な土層の堆積状態は同じであった。遺構検出面は表土下にある黒褐色粘質土の直下であり、暗褐色土が埋没土であった。さらに深い場合には、シルト・PEAT・砂などがあった。

今回の調査で検出した遺構は弥生時代後期から古墳時代前期にかかる時期と律令期の2時期があり、溝状遺構11条、土壇3基と性格の不明な落ち込みが多数あった。

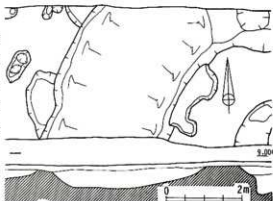
2 遺構各説

1) 江跨地区

江跨地区の1・2区と3区の南側は土壇と溝状遺構が、複雑に重複し、別個に遺構を確認することは、困難であった。

SD-003（第4図）

1区の東側で検出した弧状の溝状遺構で、南西から北東に延びて東に曲線を描いている。調査区内では長さ4.55mが検出できた。上端の幅は、最大3.20m・最小3.05mで平均3.15mほどであった。上端からの深さは、0.55～0.50mで北西に向かって0.05m下降していた。溝底は、検出した範囲内のことではあるが、溝の東半分がやや浅くなっていた。出土品には後期弥生式土器、古式土師器等がある。



第4図 SD-003実測図

SD-002（第5図）

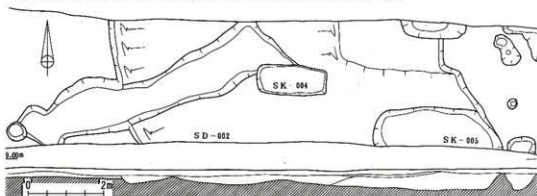
1・2区の中央で検出した溝状遺構で南北方向に延びていた。調査区内では長さ3.43mが検出できた。上端の幅は、最大9.45m・最小8.75mで平均9.0mほどであった。上端からの深さは、西側で0.33m、東側で0.51mと東側が深く、北に向かって下降していた。この溝状遺構の溝底は、凹凸が激しく、土壇2基（SK-004・SK-005）と細長い落ち込み（SD-007）が重複してその中にあった。出土品には、後期弥生式土器・古式土師器がある。

SK-004（第5図）

2区のSD-002の溝状遺構内で検出した土壇で、隅の丸い長方形を呈していた。土壇はSD-002の中央にあり、長軸を東西方向に向けていた。長軸は1.8m、巾が0.8mで壇底が平坦になっており、深さは0.33mで、壁が垂直に近く起っていた。出土品には、古式土師器がある。

SK-005 (第5図)

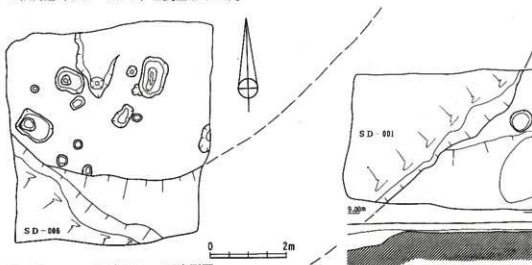
2区にあり、SK-004と同様にSD-002の溝状遺構内で検出した土壌である。SD-002の東岸に接してあった。土壌は東西に長軸を持ち、SK-004と同じ方向で規模はやや大きい。長軸の長さは3.4mで、幅は調査区内では両辺を検出できなかったが、1mよりはやや広くなると思われる。深さは0.47mで、壁が垂直に近く起って墳底が平坦になっていた。出土品は、土師器がある。この2基の土壌は土壌墓と考えるべきものであろう。



第5図 SD-002 SK-004 SK-005実測図

SD-001 (第6図)

2区の西端から3区南半分にかけて検出した北東から南西に延びる溝状遺構である。調査区内では2区では長さ5.07m、3区では4.03mが検出できた。上端の幅は、2区と3区が連結していないために正確には把握できないが4m程であろう。上端からの深さは、0.55~0.82mで北西に向かった0.32m下降していた。溝底は浅皿状を呈し、なだらかな肩をもっていた。3区内で自然の旧河道(SD-006)と交差している。



第6図 SD-001とSD-006実測図

SD-006 (第3・6図)

3区から6区までに検出した大きな溝で上叡生田遺跡第1次調査でも検出されている。調査区内では3区で長さ4.92mを検出した。旧河道の北岸の一部だけの確認で幅は把握できなかったが、3区と6区ともに肩口から急に落ち込んでいた。

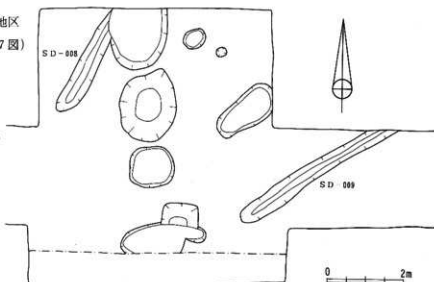
各溝状遺構の間には不定形の落ち込みがあるが、どのような目的をもって掘り込まれたかは不明である。

各遺構相互の新旧関係は、SD-002とそこにあるSK-004・SK-005の関係についてはSK-004・SK-005が2基共にSD-002より古い。

土層は地表からの耕土と、遺構の埋没土に大別される。埋没土にはほぼ共通した暗褐色の土が上半を占め、浅い遺構ではそれだけが充満していたが、溝状遺構や土壌の深いものには漆黒色の粘性の強い土が暗褐色土からスムーズに変化している。暗褐色土は、金属分（主に鉄分と思われる）を多量に含んだ土層で、出土した土器には厚く鉄分を含む土が錆着し、水洗しても落ちなかった。漆黒色土は、水分を常に含んでおり、植物などの有機質の遺存させるような状態にあった。これらの溝状遺構が水路として使用されていた可能性については、遺構の底部に近い部分における堆積物の状態から推定するならば漆黒色の粘質土が厚く堆積しているだけで、砂・小砂利等は全く無かった。このことからいわゆる用排水としての水路とは到底考えられない状態であった。

2) 八ヶ坪・塚町地区 SD-008 (第7図)

6区の東端と7区の境で検出した遺構群の中にあつた溝状遺構である。拡張した6区の東端の北北東から南南西に延び、調査区内で長さ3.05mが検出できた。上端の幅は、最大0.55m・最小0.45mで平均0.5mだった。上端からの深



第7図 SD-008・009実測図

さは、0.15~0.19mで北北東に0.05m下降していた。溝底は、浅皿状を呈していた。出土品は、ほとんどなかった。

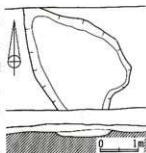
SD-009 (第7図)

7区の西端で検出した溝状遺構で北東から南西に延び、調査区内では長さ4.45mが検出できた。上端の幅は、最大0.55m・最小0.37mで平均0.5mだった。上端からの深さは、0.05~0.11mで北東に0.03m下降していた。溝底は、浅皿状を呈していた。SD-008・009の他に不定形の落込み等があり、これらはすでに削平されており、遺構の性格については不明である。出土品は、ほとんどなかった。

6・7区からは、その他に8ヶ所で土壌を検出したが、SD-008・009と同様にほとんど遺物が伴っていなかった。これらの落ち込みの時期については不明なままであるが、現代に近いことも考えられる。

SK-010 (第8図)

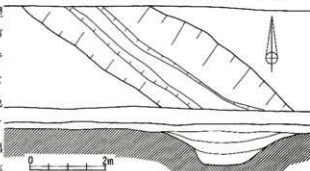
13区で検出した土壌で、墳底が浅皿状を呈し、不定形の平面形をしていた。遺構からは良好な状態で、土師器、須恵器の一括資料がえられた。土壌は、幅3.0mの調査区内には納まらず、南北ともに端を確認できなかったが、すでにその幅を狭めており、南北の幅が3.0mを、大きく超えるものとは思えないと思われる。東西の幅は最大で2.63mを計測できるが不定形であるために計測点によっては異なっていた。深さは、0.15~0.20mほどで平坦な墳底から壁が緩やかに立ち上がっていた。



第8図 SK-010実測図

SD-011 (第9図)

14区で検出した溝状遺構で北西から南東にのび、調査区内では長さ4.95mが検出できた。溝底は、二段に掘り込まれ、上段の上端の幅は、最大2.30m・最小2.05mで平均2.2mであり、溝の中央の下段の幅は、最大0.82m・最小0.65mで平均0.7mの細い箱掘りの溝がある。上端からの上段溝底の深さは、0.43~0.39mで下段溝底までの深さは0.89~0.92mで北西に0.05m下降していた。上段底面の幅は、最大0.88m・最小0.77mで平均0.8mであり、下段底面の幅が、最大0.45m・最小0.25mで平均0.35mであった。中央の溝の肩は垂直に近い状態であったが、外側の溝はなだらかな肩をしている。遺構に埋没していた土砂は、3層に分けられ、いずれも水分を多く含んだ粘性の強いものであったが流路として利用された痕跡はなかった。上部の2層は、暗褐色の似た色調をしていたが、中央の細い溝を埋めていた。下層は淡い黒灰色をしていた。出土品には後期弥生式土器、古式土師器等がある。



第9図 SD-011実測図

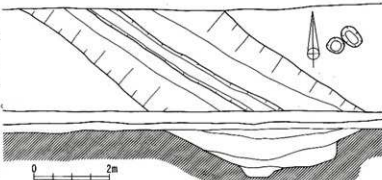
SD-012 (第10図)

15区からも14区で検出した溝と同様の溝状遺構を検出した。これは北西から南東方向にのびてSD-011とはほぼ平行して掘られている。調査区内では長さ4.57mが検出できた。

SD-012は、SD-011より大型で、上段の上端の幅は、最大3.30m・最小3.00mで平均3.1mであり、中央にある下段の溝の上端の幅は、最大1.40m・最小1.25mで平均1.3mの細い箱掘りの溝があった。上端からの上段溝底の深さは、0.97~0.99mで下段溝底までの深さは1.32~1.35mで北に0.15m下降していた。遺構の形状もSD-011と同じように二段に掘込んでいた。二段に掘込まれた溝は、上段の底面がひろく肩の緩やかな箱掘りのようで、中央の溝も細く深い箱掘りになっている。上段底面の幅は、最大1.37m・最小1.25mで平均1.3mであり、下段底面の幅は、最大0.47m・最小0.35mで平均0.4mの箱掘りである。遺構に埋没していた土砂は4層に分けられる。上半の2層は、SD-011にあった上の2層と最下層と同じ色調である。

3層は黒灰色をした粘性の強い土で、直上の土層に近いものである。最下層の4層は漆黒色の粘性の強い土で、水分を多く含んでいる。

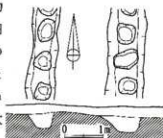
SD-012もSD-011と同様に、堆積状態と堆積物からは流路として利用された痕跡はない。



第10図 SD-012実測図

SA-013・014 (第11図)

16区で検出した平行した2条の溝の中に掘られた2列の柱穴列で、北から南に平行して延びていた。調査区内ではSA-013が長さ2.40m、SA-014長さ2.35mの溝と、SA-013で4個、SA-014で4個の柱穴が検出できた。2条とも溝の中には柱間寸法0.6m等間の柱穴列がある。2条の溝状遺構は西側のSA-013は上端の幅約0.7mで、上端からの深さ約0.4mの溝の溝底の幅とほぼ同じ不整形の柱穴の上端があり、径0.5~0.6m、深さ0.4mであった。他方のSA-014は上端の幅約1.0mで、深さ約0.4mの溝の溝底の幅とほぼ同じ不正円形の柱穴の上端があり、径0.45~0.6m、深さ0.4mであった。柱穴の形状はほぼ同じようであった。これら2条の柱穴の列は、集落を囲む欄列であろう。



第11図 SA-013・014実測図

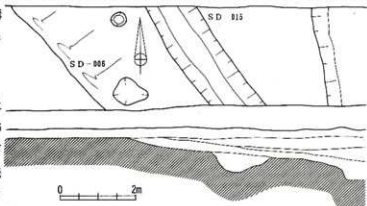
SD-006 (第3・12図)

16区東端から17区にかけて検出された大きな溝の肩は、上叢生田第1次調査と江跨地区で検出された自然の旧河道と同じ物であろう。16区と17区では、北西から南東にのび、なだら

かな肩となっている。肩から河道の中央に向かって7～10mはなれたところまではなだらか延び、ここから垂直に近く落込んでいる。この旧河道の対岸は、25区の南で検出され肩口の方は、同じであった。25区では、肩から2.5mほど中央によったところまでなだらかで、そこから急に落込んでいる。旧河道内は大半を占めるシルトと砂が互層となり、植物の自然遺体が多く含まれている。

SD-015 (第12図)

17区で検出した溝状遺構で、SD-006がなだらかに下降する溝の斜面にある。SD-006の肩口から2.5m河道の中央にむかってはなれたところで検出し、SD-006と同じ方向に延びる幅2.3mの溝状遺構である。調査区内では3.10mが検出できた。上端の幅は、最大1.21m・最小1.10mで、平均1.15mほどであった。上端からの深さは、0.45～0.56mで北西に向かって0.11m下降していた。溝底は、浅い浅皿状を呈していた。SD-006とは、この遺構が古い。



第12図 SD-015実測図

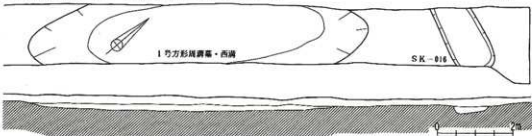
1号方形周溝墓・西溝 (第13図)

26区から27区にかけて、発掘区とはほぼ同じ方向にのびた浅皿状の溝を検出した。これは上萌生田遺跡第一次調査時に検出された四隅が分断された1号方形周溝墓の西溝である。この土壌の規模は、長さ8.97mで幅が調査区外では把握できず、深さ0.25mであった。

SK-016 (第13図)

27区の1号方形周溝墓の北側に検出した隅が丸い長方形の土坑である。調査区内で全体を検出できなかったが、長軸が東西方向を向いていた。長さは、調査区内において1.97mを検出しており、これ大きくこえることはない。上端の幅は、1.10m、墳底の幅0.90mで平坦な墳底をしていた。深さは、0.21mで垂直に近い壁を持っていた。

(山口)



第13図 1号方形周溝墓・西溝とSK-016実測図

第3節 遺物

1 遺物概説

本遺跡の出土遺物には、江跨地区、八ヶ坪・塚町地区ともに弥生・古墳・奈良の主に4時代の品がある。そして、それらの内には、土器類、石器類、銭貨、土製品などがある。以下、これらを各時代ごとに報告する。

弥生時代の遺構の1号方形周溝墓・西溝からは出土遺物がなく、江跨地区のSD-002溝とSK-005土壕から古墳時代の土師器とともに出土しただけであるので、古墳時代の遺物と一括して報告する。律令期についてはSD-006溝から多量の遺物が出土し、定期的に他の時代と掛け離れているので独立した一項を設ける。

2 遺物各説

1) 弥生・古墳時代

弥生・古墳時代の遺物には、土器類、土製品などがある。

土器類(第17～24図)

弥生・古墳時代の土器は、江跨地区の1～3区、八ヶ坪・塚町地区の13～27区と遺構から出土しており、江跨地区の4区以西と、八ヶ坪・塚町地区の9区以西ではきわめて希薄な状態であった。以下、出土遺構ごとに説明してゆく。

なお、出土土器の個別の詳細は観察表に譲り、主要な品のみにについて説明したい。

SD-001出土土器(第17図 1～4)

土師器の有孔鉢(1)・壺(2)・高坏(3)等がある。

有孔鉢(1)は、半球形の胴部の底部に1cm足らずの孔を焼成前に穿孔している。外面は不規則なナデが施され、内面の口縁部に横ナデ、胴部の上半に刷毛で仕上げられて下半が匏削りされている。隣接する上筋生田遺跡第Ⅰ次調査地域でも数点出土している。

SD-002出土土器(第17図 5～9)

弥生土器の甕(5)と土師器の甕(6・7)・高坏(8)等がある。

弥生土器の甕は胴部が無花果形を呈し、底部が長く延びている。頸部から屈曲して外上方に延び、さらに外反している。内面の底部から5cmほど上に器厚が一部だけ厚い部分があり、接合痕と思われる。口縁部の端面の下側に匏による連続刺突文でキザミ目を施している。器面は全面に刷毛で調整されており、外面が右下がり、内面が口縁部に横方向胴部に右下がりに施されている。外面頸部には一巡する横ナデが刷毛を消している。

土師器の甕には、在地的ないわゆる複合口縁に擬凹線を施したもの(6)と、口縁の端部内面を肥厚させた畿内的様相のもの(7)の2種がある。高坏(8)は、坏部が胴部の著しく扁平になった複合口縁の甕で口縁が極端に長く延びている。

SD-003出土土器(第17図 10～13)

弥生土器の甕(10)と土師器の甕(11)・脚部(12)等がある。

弥生土器の甕(10)は、胴部が丈高の無花果形を呈し、底部の中央が凹んでいる。内面に指頭圧痕のある頸部から屈曲して外反し、口縁部端面を段を持って外上方に引き上げている。胴部の外面は刷毛目仕上げで、口縁部の内外面が横ナデが施され、僅かではあるが刷毛目が胴部内面に残っている。

土師器の甕は、肩から口縁部にかけての出土している。複合口縁に擬凹線が施され、内面に指頭圧痕が断続的に残っている。口縁は端部が外上方に薄く引き出されており、塚埧Ⅲ式に比定される。

SK-004出土土器(第18図 14~17)

土師器の壺(14)・手捏ね土器(15・16)・高坏(17)ある。

高坏(17)は丹念に篋で研磨された脚部の上に著しく外上方に引き伸ばされた複合口縁を持つ扁平な壺が付いている。手捏ね土器は壺(15・16)のミニチュアである。

SK-005出土土器(第18・19図 18~23)

後期弥生土器の大型の壺(18)と長頸壺(19)と土師器の甕(20・21)・壺(22)等がある。

後期弥生土器の大型の壺(18)は胴部が無花果形を呈し、底部が欠失している。胴部からやや内傾して大きく外反する頸部は水平にまで反り、外上方に延びる薄く短い端面が付けられている。胴部と頸部の接合部に明瞭な稜線を持つ凸帯が一巡している。調整は胴部の外面だけに右下がりの粗い刷毛が施され、頸部に縦方向の同じ刷毛がある。内面の胴部には粗い篋削りが全面にあり、他の部分は横ナデで仕上げられている。

長頸壺(19)は、長頸壺形土器で胴部は丈高な無花果形を呈し、底部が不安定である。頸部から緩やかに真上に胴部高の1/2ほど延びている。外面と頸部上半の内面を刷毛目で仕上げ、内面に篋削り施され、頸部には篋で縦2条の記号が描かれている。

土師器の甕は胴部だけで外面が刷毛で仕上げられ、内面が篋けずりされている。小形の壺も頸部以上が欠損していたが、肩部に4条の刷毛の刺突による列点文が横走している。

以上が江跨地区の遺構から出土した土器である。遺構を検出する前の包含層から出土した遺物にも良好な資料が多い。

SD-007出土土器(第19図 24)

土師器の甕(24)がある。小型の甕は胴部下半が欠失して器面が荒れていた。頸部から外反し、段を持って真上に延びる複合口縁は塚埧Ⅰ式に比定される。

以上が江跨地区で遺構の覆土と底から出土したものの一部である。これらの遺構の間と遺構上面の包含層からも多くの遺物が出土しており、その中から主要な遺物について抽出し、説明する。

SD-001とSD-002の間の包含層に出土した土器(第16図 25~29)で、土師器の甕(25・26)・壺(27)・高坏(28)等がある。甕は胴部下半が欠失しているが、共に複合口縁に擬凹線が施されて端部が僅かに薄く外上方に引き出されたもの(25)と、端部を丸く納めたもの(26)がある。壺(27)も同様の複合口縁を持ち、胴部がやや扁平である。

1・2・3区の包含層に出土した土器(第16図 30~42)で、土師器の甕(30~33)・壺・鉢・有孔鉢・高環等がある。甕は胴部下半が欠失しているが、共に複合口縁に擬凹縁が施されて端部が大きく外上方に引き出されたもの(30)と、端部を丸く納めたもの(31)がある。2点とも外面は刷毛で仕上げられ、内面を篋削りしている。壺は無頸壺(36)と口縁が欠失した小形の壺(34)等がある。同様の無頸壺は隣接した上萌生田遺跡第Ⅰ次調査地域でも出土しており、縦走する把手が付いた例もある。鉢は口径の半分ほどの底部を持つ希な例(37)と胴部下半だけの1cm弱の孔を穿った有孔鉢(38)である。高環は坏部の口縁部を欠失しているもの(39)と脚部だけの3点(40~42)がある。脚部だけのものには弥生土器の高環に見られる脚部の形状をもつもの(40・41)があり、弥生時代後期に遡る可能性もある。

SD-008・SD-009からは図化に耐えるものは無かった。

SK-010出土土器(第20図 43~50)

土師器の甕(43)・高環(4)・坏(45~48)・手捏ね土器(50)と須恵器(49)の坏身がある。

甕(43)は逆台形の鉢形を呈し、口径の1/3ほどの孔が底部いっぱいに穿たれている。内外面ともに荒い篋削りのままで丁寧な仕上げはしていない。口縁部には横ナデが施されている。高環(44)は坏部の底部から立ち上がりにかけて不明瞭な稜がある。脚は脚柱部が膨らみ、裾を横ナデで仕上げている。坏には口縁の端部を内湾させるもの(45・46)と、外上方に僅かに折り返すもの(47・48)がある。須恵器の坏身(49)は底部が深く、立ち上がりが垂直に長く延びている。

SD-011出土土器(第20~22図 51~76)

土師器の甕(51~63)・壺(64~67)・鉢(68・69)・高環(70~73)・器台(74・75)・蓋(76)がある。

甕は口縁部から胴部の上半が出土している複合口縁のもの(51~53)と、丈低な倒卵形の器体から『く』の字状に屈曲した口縁部を僅かに内湾させた口縁の端部を内面に小さくつまみあげたもの(54~56)、丈低な倒卵形の器体から外反した口縁は段をもって外上方に延びている。段には鉤状の凸帯を付けているもの(58~62)がある。これらの甕は外面が刷毛で仕上げ、内面が篋削りされている。壺(64)はしっかりした底部をもつ球形の器体から屈曲して大きく外反する口縁部を持ち、頸部に粘土紐で凸帯を一条巡らしている。凸帯と肩部には刷毛で列点文を刺突している。口縁部に段を持つ壺(65)は最大径が上半にある球形の器体で、口縁が甕(58~62)と同様である。小型の壺(66)は球形の器体から短く外反する複合口縁をもつ擬凹縁は施されていない。鉢は浅鉢(68)と有孔鉢(69)がある。有孔鉢(69)はSD-001で出土したもの(1)と酷似している。高環(70~72)は坏部の底部から段を持って立ち上がる。器台は器受部の端部が段をもって直立したものの(74)とそうでないもの(75)がある。

SD-012出土土器(第22~24図 77~107)

甕には口縁部から胴部の上半が出土している複合口縁のもの(77~79)がある。これらには口縁部に擬凹縁が施されたもの(78)と無いもの(77・79)がある。丈低な倒卵形の器体から『く』の字状に屈曲した口縁部が外上方に延び、口縁の端部を内面に小さくつまみあげたもの(80~84)と端

部を丸くおさめたもの(85~87)もあり、丈低な倒卵形の器体から外反した口縁は段をもって外上方に延ばし、段には鈎状の凸帯を付けているもの(58~62)がある。これらの甕は外面が刷毛で仕上げ、内面が蒔割りされている。壺には多様な器形がある。大型の壺(94)はしっかりした底部をもつ球形の器体から屈曲して大きく外上方に延びる口縁部をもち、頸部に粘土紐で刷毛の刺突によるキザミ目が付けられた凸帯を一条巡らしている。この壺の器体には龍目が明確に遺されている。器体部が欠失している複合口縁の壺(97)は口縁部に擬凹線が施されていない。口縁部に段を持つ壺(97)も器体部が欠失している。この壺の口縁は甕(58~62)と同様である。弥生土器の器体部が欠失している長頸壺(96)や、細頸壺と思われる器体部(93)だけもある。鉢は口径の1/4ほどの底部があり、口縁と胴部が明確になっている。丈低な脚に半球形の鉢が付けられているもの(101)や、現代の茶碗のような小さな台に鉢がついているもの(102・103)がある。高坏は坏部の底部から段を持って立ち上がるもの(104・106)と段が不明瞭となっているもの(105)がある。器台(107)は脚柱部だけが出土しており、脚柱部に3条の凹線が3段にひかれ、その間を縦長の刺突による列点文がある。

SD-015 出土土器(第22図 108)

弥生土器の台付甕(108)がある。台付甕は、最大径を上半にもつ扁平な無花果形の胴部で内面が荒い横ナデで仕上げられ、外面が右下がりの刷毛仕上げであった。頸部からは「く」の字状に緩く屈曲して梁を持って垂直に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部は横ナデで仕上げられている。脚台は、端部が欠失しているが、横ナデが施されている。

八ヶ坪・塚町地区の包含層に出土した土器は、甕(第25図 109~112)等がある。

石器類(第14図)

八ヶ坪・塚町地区の16区から磨製石斧が包含層より出土している。材質は蛇紋岩で基部が欠失した後に敲打、研磨されて再利用しているようである。刃部には僅かながら斜方向の擦痕が認められ、刃こぼれが顕著に見られる。

2) 律令時代

律令期の遺物は土器・銭貨等がある。

土器類(第25図 113~139)

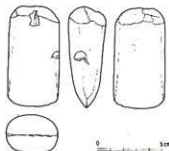
律令期の須恵器はSD-006とその周辺の包含層にあり、上萌生田遺跡第Ⅰ次調査でも検出している旧河道に集中している。

なお、出土須恵器の個別の詳細については観察表に譲る。

SD-006 出土土器(第25図 113~139)

須恵器の坏A(113~127)・坏B(137~139)・甕A(130~135)・甕B(136)・蓋(129)・灰陶器の埴(128)等が出土している。全体的に胎土には微少な石英粒を含み、焼成は概ね良好である。付きAは口径は13cm前後、器高3.5cm前後が多く、皿Aは口径17cm、器高2.6cm前後が多い。

両方



第14図 石器実測図



第15図 SD-006出土土器に墨書された字句

第1表 SD-006及び包含層出土墨書土器一覧表

No	器種	墨書位置	墨書字句	No	器種	墨書位置	墨書字句
15	1	埴B 底部外面	道□(麻呂カ)	16	蓋	外 面	北
15	2	坏A 底部外面	家麻呂・□(北カ)	17	坏A	底部外面	北家
15	3	皿A 底部外面	古人	18	坏B	底部外面	北・家
15	4	坏A 底部外面	阿胡	19	坏B	底部外面	北家
	5	破片 外 面	長	20	坏A	底部外面	東
	6	蓋 外 面	北	21	埴A	底部外面	東
15	7	坏A 底部外面	北	22	坏B	底部外面	中
	8	坏A 底部外面	北	23	坏A	底部外面	中
	9	坏B 底部外面	北	24	坏A	底部外面	中
	10	坏A 底部外面	北	25	坏A	底部外面	中
	11	坏A 底部外面	北	26	蓋	底部外面	≠□
	12	坏A 底部外面	□(北カ)	27	坏A	底部外面	≠
	13	坏A 底部外面	北	28	坏A	底部外面	三
	14	坏A 底部外面	北	29	坏A	底部外面	万
	15	坏A 底部外面	北	30	破片	外 面	田

(坏・皿・埴のうち高台のないものをAとし、あるものをBとした。)

(山口)

とも規格化されていると思われる。坏A・皿Aともに底部には宛切り痕をとどめ、回転ナデ調整のものが殆どである。坏Bは138・139が器高、口径の差はあるが形態は同じで、137は高台が外側に踏ん張り体部も外側に大きく開く。119・132の底部外面には明らかに墨書がされているが判読は不可能である。これらの須恵器には墨書されたもの(第15図)が多くあり、判読可能なものについては第1表にまとめた。

銭貨(第16図)

本邦初鋳の和同開寶が1点出土している。低湿な土層から出土したために保存状態が良好で、緑青の噴き出しが殆ど見られない。今回の六条・和田地区遺跡群の調査においては、上蔭生田畑田遺跡から隆平永寶がまとまって出土しただけで皇朝12銭の出土例は少ない。

(山口) 第16図 和同開宝拓影



第2表 上蔭生田遺跡江跨地区出土土器観察表

器 名	土器 番号	法量 cm	形態の特 徴	手法の特 徴	胎土・質 色 調	備 考
有 孔 鉢	1	口径 18.0 器高 10.9	口縁部は内湾する体部から段をなして、直線的に立ち上がる。 底部に円孔がある。	外面の調整は不明。 体部内面上半は縦もしくは、右下がりのハケ調整する。下半のヘリ削りは上 下文互に時計回りである。 口縁部内外面はヨコナデ調整する。	砂粒を多く 明褐色 含む。 焼成やや不良	ほぼ完品 SD-001出土
壺	2	胴径 12.8 器高 9.5	最大径が上半にある球形の体部を持つ。	体部外面上半は右下がりのハケ調整する。 内面はヘリ削りを横方向に交互にする。	砂粒をほとんど 灰明 ど含まない。 褐色 焼成良好	口縁・底部を欠く。 SD-001出土
高 坏	3	底径 14.5 器高 8.2	脚部は坏部から直線的に外下 方に広がり、腹部でさらに開く。 脚部中央に4個の小孔がある。 坏部は外上方に大きく開いて いる。	脚部内面は時計回りに右下がりのハケ 調整する。外面はヨコナデ調整する。 坏部外面は横方向のハケ調整する。	微砂粒を含む。灰明 焼成良好 色	坏部上半を欠く。 SD-001出土
壺	4	口径 10.7 器高 4.9	つまみ部は外上方に短く開く。 体・口縁部は外下方に直線的 にのびる。	つまみ部は指張の押圧。体部外面は放 射上のヘリ削り。内面は時計回りヘリ 削りのあとヨコナデ調整する。	微砂粒を多く 明褐色 含む。 焼成やや不良	完品 SD-001
甕	5	口径 24.3 胴径 31.0 器高 30.9	口縁部は体部から屈曲して外 反し、増面に外傾する面をも つ。増面外側にキズが一周 する。体部はいちじく形で突 出した底部をもつ。	体部内面下半以外はハケ調整する。	砂粒を含む。 明褐色 焼成不良	ほぼ完品 SD-002
甕	6	口径 19.2 胴径 17.7 器高 9.3	口縁部の外面に縦を形作り、 直立して立ち上がる。 口縁部増面に6条の縦四線文 を巡らす。	外面の調整は不明である。 内面は口縁部がヨコナデ調整。体部が 時計回りのヘリ削りする。	砂粒を多く含む。 明褐色 含む。 明褐色 焼成やや不良	胴部下半を欠く。 SD-002
甕	7	口径 15.4 器高 8.3	口縁部は屈曲して内湾するに 外方へ立ち上がる。 口縁部内面を小さく肥厚させ ている。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 腹部から体部にかけて内面は指張で押 圧し、以下をヘリ削りする。外面のハ ケ調整は明瞭でない。	微砂粒を含む。 暗褐色 焼成良好	胴部下半を欠く。 SD-002
高 坏	8	口径 18.9	坏部は扁平状で口縁部は外	坏部は内外面ともヨコナデ調整する。	微砂粒を含む。 明褐色	ほぼ完品

		口径 12.6 器高 14.6	面に線を形作り、やや外上方に大きく立ち上がる。 脚部は脚部からゆるやかに広がり、脚部でさらに開く。	脚部外面は放射上のヘラ磨きし、内面が上平をヘラ削り、下平と裾を指頭押圧後ヨコナデ調整する。	焼成やや不良	SD-002
装	10	口径 14.6 胴径 19.4 器高 24.6	口縁部は外面に線を形作り、外上方に立ち上がる。体部は股大径を中位よりやや下に持つ無花梨形で、中央のへこんだ底部がある。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部内面はわずかにハケ調整が見られ、頸部に指頭の圧痕がある。外面はハケ調整がわずかにあるが詳細は不明。	微砂粒を含む。 焼成やや不良	明褐色 ほぼ完品 SD-003
装	11	口径 17.5 器高 6.6	口縁部は外面に線を形作り、外反して外上方に立ち上がる。口縁部端面には10本の縦門線文を施す。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。口縁部内面に指頭圧痕が残る。体部外面は右下がりのハケ調整する。外面のヘラ削りは時計回りである。	微砂粒を含む。 焼成やや不良	明褐色 口縁部と肩のみ遺存。 SD-003
脚	12	口径 16.0 器高 8.1	脚部は、棒状にのびる脚部からゆるやかに広がり、稍曲部に3個の小孔をもつ。	脚部外面は脚部と脚部と2段に縦方向のヘラ磨きする。内面は上半に絞った痕跡と、下半にハケ調整後、ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	明褐色 脚部のみ遺存。 SD-003
造	15	胴径 7.5 器高 6.3	球形の体部で小さなへこみ底をもつ。	体部の内外面ともに巻き上げ、指頭の押圧後ナデ調整する。	砂粒を多く含む。 焼成やや不良	明褐色 胴部以上を欠く。 SK-004
造	16	胴径 6.6 器高 6.2	球形の体部で小さなへこみ底をもつ。	体部の内外面ともに巻き上げ、指頭の押圧後ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成不良	明褐色 口縁部以上を欠く。 SK-004
高	17	口径 25.8 底径 14.8 器高 37.0	坯部は扁平傘状で口縁部は外面に線を形作り、大きく外上方に大きく開く。 脚部は脚部が長く、ゆるやかに脚部で広がる。	坯部は内外面とも縦方向のヘラ磨き調整する。 脚部外面は放射上のヘラ磨き調整し、内面はナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成やや不良	明褐色 ほぼ完品 SK-004
点	18	口径 24.0 胴径 33.2 器高 43.5	口縁部は外面に傘下する線を形作り、外上方にのびる。 頸部は筒状で上端が大きく外反し、口縁部端面と接合する。いちじく形の体部は頸部との接合部に貼り付け凸部を流す。	口縁部頸部は内外面ともにヨコナデ調整する。頸部体部外面はハケ調整し、体部内面はヘラ削りする。	砂粒を含む。 焼成不良	明褐色 底部を欠く。 SK-005
長 須 歯	19	口径 10.4 胴径 15.6 器高 25.1	やや丈短な球形の体部からゆるやかに直立し、口縁部まで長く立ち上がる。 底部は不安定で小さい。 頸部には縦に2本のヘタ記号がある。	口縁部はヨコナデ調整する。外面は縦方向のハケ調整が全面にきれいに。内面は、頸部がヨコナデ調整、体部が底部から上方にむかって時計回りにヘラ削りされている。	微砂粒を殆ど含まない。 焼成良好	明褐色 完品 SK-005
造	22	胴径 12.1 器高 9.4	扁平な球形の体部で小さな底部を持つ。胴部には4本のハケによる刺突文を施す。	体部内面は、ハケ調整をナデ調整で消す。外面もナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	明褐色 口縁部を欠く。 SK-005
装	24	口径 12.4 胴径 12.6 器高 7.2	口縁部の外面に線を形作り、直立して立ち上がる。 口縁部端面に6本の縦門線文	調整不明。	微砂粒を多く含む。 焼成やや不良	明褐色 胴部下半を欠く。 SD-007

			を返らす。				
壁	25	口径 18.1 胴径 20.1 器高 14.9	口縁部の外面に稜を形成し、 直立して立ち上がりて端部を 外反する。 口縁部端面に8本の縦凹線文 を返らす。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 口縁部内面に指頭圧痕が残る。 体部内面のヘリ削りは逆時計回りである。 外面は肩部が斜方向、その下を右下がりのハケ調整する。	微砂粒を多く含む。 焼成やや不良	明褐色	胴部下平を欠く。 2区包含層
壁	26	口径 16.8 胴径 19.0 器高 9.0	口縁部の外面に稜を形成し、 外上方にのびる。 口縁部端面に6本の縦凹線文 を返らす。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 体部内面のヘリ削りは逆時計回りである。 外面にハケ調整の痕跡がある。	砂粒を多く含む。 焼成やや不良	褐色	胴部下平を欠く。 2区包含層
壺	27	口径 14.2 胴径 15.1 器高 10.8	口縁部の外面に稜を形成し、 外上方にのびる。 口縁部端面に12本の縦凹線文 を返らす。 体部はやや扁平な球形である。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 体部内面のヘリ削りは時計回りである。 外面は方肉性のないハケ調整する。	微砂粒を含む。 焼成やや不良	明褐色	底部を欠く。 2区包含層
高 杯	28	器高 8.8	杯口縁部は底部との接合部外面に稜を形成し、ゆるく内湾しながら外上方に立ち上がる。 脚部には4個の小孔がある。	杯部内外面はヨコナデ調整する。 脚部外面は斜方向のヘリ削りする。	微砂粒を含む。 焼成やや不良	黄褐色	杯部下平と脚部下平を欠く。 1区包含層
壁	30	口径 18.5 器高 9.2	口縁部の外面に稜を形成し、 ゆるく外反して外上方にのびる。 口縁部端面に8本の縦凹線文 を返らす。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 体部内面のヘリ削りは逆・順時計回りがある。外面は右下がりのハケ調整する。	砂粒を多く含む。 焼成不良	明褐色	胴部下平を欠く。 1区包含層
壁	31	口径 17.3 胴径 17.6 器高 8.4	口縁部の外面に稜を形成し、 直立する。 口縁部端面に5本の縦凹線文 を返らす。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 口縁部内面に指頭圧痕が残る。 体部内面のヘリ削りは逆時計回りである。 外面の調整は不明。	微砂粒を多く含む。 焼成やや不良	明褐色	胴部下平を欠く。 1区包含層
壺	34	胴径 12.9 器高 12.9	頸部は直立するコの字状で体部は胴の中心に張った球形である。底部は小さい。	外面はヘリ削り調整する。 内面のヘリ削りは時計回りである。	砂粒を含む。 焼成良好	灰褐色	口縁部を欠く。 2区排水路
無 頸 壺	36	口径 8.4 胴径 10.5 器高 6.4	体部はソコパン玉状で小さい 底部持つ。 口縁部は短く直立する。	外面はヨコナデ調整する。 内面のヘリ削りは時計回り、下半と底部に指頭の押圧が残る。	砂粒を多く含む。 焼成良好	灰褐色	ほぼ完品 2区包含層
鉢	37	口径 15.1 胴径 13.4 器高 6.9	口縁部は内湾する体部から外反して外上方に立ち上がる。 体部は大きな底部から外上方に内湾してのびる。	口縁部内外面と体部外面底部直上に指頭圧痕が残る。口縁部と体部外面はヨコナデ調整する。体部内面のヘリ削りは時計回りである。	砂粒を若干含む。 焼成良好	明灰褐色	底部の一部を欠く。 2区包含層
有 孔 鉢	38	器高 7.8	体部は小さい底部から内湾して外上方にのびる。底部には焼成前に小孔が穿孔されている。	体部外面は下部が縦のヘリ削りで、上部が右下がりのハケ調整。内面は下部をヘリ削り、上部をヨコナデ調整する。	微砂粒を多く含む。 焼成良好	明灰褐色	胴部下半が直行。 2区包含層
高 杯	39	口径 14.0 器高 11.1	杯口縁部は底部との接合部外面に凸状の稜を形成し、内湾して直上にのびる。 脚部は棒状の脚部部からゆるやかに広がり、3個の小孔がある。	杯部は内外面ともにヨコナデ調整する。 脚部の調整は不明。	微砂粒を含む。 焼成良好	明灰褐色	杯部の口縁部を欠く。

			ある。				
脚	40	底径 14.6 器高 8.5	脚部は、棒状にのびる脚部 部からゆるやかに広がり、屈 曲部に3個の小孔をもつ。	脚部外面は脚部と脚部と2段に縦 方向のへう磨きする。 内面は上半にへう磨きと、下半にはコ ナナ調整する。	微砂粒を多く 含む。 焼成やや不良	赤褐色	脚部のみ遺存。 2区包含層
脚	41	底径 16.4 器高 4.7	脚部は脚部から外面に明 瞭な段を形作って外下方に広 がる。	内外面ともにナナ調整する。	微砂粒を若干 含む。 焼成やや不良	明褐色	脚部のみ遺存。 1区包含層
脚	42	器高 7.7	脚部は中位がふくらむ。	外面は腹のへう磨きし、内面をコナ ナ調整する。	微砂粒を多く 含む。 焼成不良	明褐色	4部、裾部を欠く。 2区包含層

第3表 上蒔生田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器観察表

器名	番号	法量 cm	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・質	色 調	備 考
飯	43	口径 21.2 底径 6.5 器高 16.9	1 脚部は外上方に直線的にの びる体部から小さな段をなし て短く立ち上がる。 底部にすべてを覆った円孔が ある。	1 脚部内外面はコナナ調整する。 体部内外面はへう磨きする。	砂粒を含む。 焼成良好	赤褐色	ほぼ完品 SK-010
高 杯	44	口径 13.8 底径 11.2 器高 10.0	杯口縁部は底部との接合部外 面に稜を形作り、ゆるく内凹 して外上方のびて縁部が直 立する。 脚部は中位がふくらむ脚部 部からゆるやかにひろがり、 裾部は水平に近い。	表面の荒れが激しく縁部は不明である が、杯部内外面ともにコナナ調整 する。 脚部は外面が腹のへう磨き調整し、内 面が脚部をへう磨きし、脚部をコナ ナ調整する。	砂粒を多く含 む。 焼成普通	赤褐色	ほぼ完品 SK-010
杯	45	口径 12.4 体径 13.1 器高 5.0	口縁部は扁平な半球形の体部 から小さく内凹する。	口縁部内外面はコナナ調整する。 体部外面はへう磨きし、ナナ調整する。 内面はへう磨きし、へう磨きする。	微砂粒を含む。 焼成良好	褐色	ほぼ完品 SK-010
杯	46	口径 13.7 体径 14.1 器高 4.2	1 脚部は扁平な半球形の体部 から小さく直立する。	1 脚部内外面はコナナ調整する。 体部内外面はへう磨きする。	砂粒を多く含 む。 焼成良好	褐色	ほぼ完品 SK-010
杯	47	口径 13.2 体径 12.9 器高 5.0	口縁部は扁平な半球形の体部 から小さく外反する。	口縁部内外面はコナナ調整する。 体部外面はへう磨きし、内面がへう磨 きする。	砂粒を若干含 む。 焼成良好	赤褐色	ほぼ完品 SK-010
杯	48	口径 12.5 体径 12.7 器高 5.3	1 脚部は扁平な半球形の体部 から小さく外反する。	口縁部内外面はコナナ調整する。 体部内外面はへう磨きする。	微砂粒を含む。 焼成良好	褐色	ほぼ完品 SK-010
杯	49	口径 9.9 受径 11.8 器高 5.1	立ち上がりはわずかに内傾し、 受部は受部から大きい。	へう磨きは受部直下から底部までの。 縦幅は時計回り。	砂粒を若干含 む。 焼成良好	赤紫色	ほぼ完品 SK-010 直糸器
帯	50	口径 5.5 胴径 6.9 器高 4.9	口縁部は球形の体部の上位を 丸くおさめている。	手捏ねし、外面を軽いへう磨きする。	微砂粒を含む。 焼成やや不良	黄褐色	完品 SK-010
壺	51	口径 19.1 器高 5.1	1 脚部の外面にゆるやかな稜 を形作り、わずかに外上方へ 立ち上がる。口縁部端面に6	口縁部内外面ともにコナナ調整する。 体部の調整は不明。	微砂粒を含む。 焼成良好	暗赤褐色	体部を欠く。 SD-011

			条の縦断線文を返らす。				
造	52	口径 15.8 胴径 18.4 器高 10.1	1 縁部の外面に線を形作り、 わずかに外上方に立ち上がる。 口縁部端面に 8 条の縦断線文 を返らす。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 体部外面は右下がりのハケ調整する。 内面のへう削りは時計回りである。	砂粒を多く含 む。 焼成良好	淡赤陶 色	胴部下半を欠く。 SD-011
造	53	口径 17.3 器高 7.2	1 縁部の外面にゆるやかな線を 形作り、外上方に立ち上がる。 口縁部は体部から屈曲して内 湾ぎみに外上方にのびる。 肩部はわずかに内上方に肥厚 している。 底部はやや突出した丸底で体 部外面の間に 7 条の沈線を通 らす。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 体部外面はハケ調整し、内面を時計回 りにへう削りする。	砂粒を多く含 む。 焼成良好	淡褐色	胴部中位以下を欠く。 SD-011
造	54	口径 19.5 胴径 25.0 器高 27.1	口縁部は体部から屈曲して内 湾ぎみに外上方にのびる。 肩部はわずかに内上方に肥厚 している。 底部はやや突出した丸底で体 部外面の間に 7 条の沈線を通 らす。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 体部外面はハケ調整し、内面はへう削 りする。	砂粒を多く含 む。 焼成良好	淡黄陶 色	ほぼ完品 SD-011
造	55	口径 15.7 胴径 18.3 器高 20.6	口縁部は体部から屈曲してや や内湾ぎみに外上方にのびる。 肩部はわずかに内上方に肥厚 している。 底部は小さく不安定な平底で ある。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 体部外面のハケ調整は時計回り、内 面は逆時計回りにへう削りする。	微砂粒を含む。 焼成良好	淡赤陶 色	ほぼ完品 SD-011
造	56	口径 15.8 器高 10.7	口縁部は体部から屈曲して内 湾ぎみに外上方にのびる。 体部はわずかに内面に肥厚し、 外縁する面をもつ。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 体部外面は横方向のハケ調整し、内面 がへう削りする。	微砂粒を多く 含む。 焼成やや不良	淡褐色	胴部下半を欠く。 SD-011
造	57	口径 14.0 胴径 16.0 器高 15.3	口縁部は体部から屈曲してや や内湾ぎみに外上方にのびる。 肩部はわずかに内上方に肥厚 している。 底部は丸底である。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。 体部内外面はハケ調整する。	微砂粒を多く 含む。 焼成良好	淡赤陶 色	ほぼ完品 SD-011
造	58	口径 21.8 器高 4.7	口縁部は体部から屈曲して外 面に凸帯を形作り、外上方に 立ち上がる。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。	砂粒を多く含 む。 焼成普通	褐色	体部を欠く。 SD-011
造	59	口径 19.6 器高 12.0	口縁部は体部から屈曲して外 面に凸帯を形作り、外上方に 立ち上がる。端面は外縁する。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。 体部は外面が肩に横、他を縦のハケ調 整する。内面はへう削りする。	砂粒を多く含 む。 焼成普通	淡褐色	胴部下半を欠く。 SD-011
造	60	口径 18.4 器高 10.1	口縁部は体部から屈曲して外 面に凸帯を形作り、外上方に 立ち上がる。端面は外縁する。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。 体部は外面がハケ調整、内面は逆時計 回りのへう削りする。	砂粒を多く含 む。 焼成普通	淡褐色	胴部下半を欠く。 SD-011
造	61	口径 22.4 器高 3.6	口縁部は体部から屈曲して外 面に凸帯を形作り、外上方に 立ち上がる。端面は外縁する。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。	砂粒を含む。 焼成普通	褐色	体部を欠く。 SD-011
造	62	口径 27.3 胴径 32.0 器高 36.5	口縁部は体部から屈曲して外 面に凸帯を形作り、外上方に 立ち上がる。 底部は不安定で丸い。 肩に左下がりのハケの連続刺	口縁部内外面ともにヨコナデ調整する。 体部外面は肩に横、他を縦のハケ調 整する。内面は逆削りする。	微砂粒を多く 含む。 焼成普通	淡黄陶 色	ほぼ完品 SD-011

			突が一辺する。				
壁	63	口径 19.2 筒高 4.3	1) 縁部はゆるく円筒して外上方に開く。	1) 縁部内外面ともにハケ調整の後にヨコナゲ調整する。	砂粒を含む。 焼成良好	褐色	脚部を欠く。 SD-011
皿	64	口径 15.8 板径 24.6 筒高 27.0	1) 縁部は外上方に大きく外反する。体部は球形で径5cmの平底をもつ。1) 縁部端面に3本の縦線文を施す。1) 縁部と体部の接合部に貼り付け凸帯を施す。ハケの連続調整がある。同時にハケ連続調整一周する。	体部は内面にへう削り。他はハケ調整する。	砂粒を若干含む。 焼成良好	淡黄褐色	ほぼ完成品 SD-011
皿	65	口径 16.7 板径 26.9 筒高 29.7	1) 縁部は体部から円筒して外面に凸帯を形作り、外上方に立ち上がる。体部は球形で丸底をもつ。	1) 縁部内外面ともにヨコナゲ調整する。体部上半は外面が滑に横。他を縦のハケ調整し、内面がナゲツけられている。体部下半は内外面ともにへう削りする。	砂粒を多く含む。 焼成良好	淡灰褐色	ほぼ完成品 SD-011
皿	66	口径 10.0 板径 11.0 筒高 10.1	1) 縁部は体部から円筒して外に横を形作り、外上方に立ち上がる。体部は球形で丸底をもつ。	1) 縁部内外面ともにヨコナゲ調整する。体部外面は時に横。他を縦のハケ調整する。内面は逆時計回りのへう削りする。	砂粒を多く含む。 焼成やや不良	淡黄褐色	ほぼ完成品 SD-011
鉢	68	口径 13.3 筒高 4.2	浅い皿状の鉢で、1) 縁部は内面に段をもつてさらに広がる。	内外面ともにヨコナゲ調整する。	砂粒を殆ど含まない。 焼成良好	明褐色	ほぼ完成品 SD-011
有孔鉢	69	口径 16.5 筒高 11.4	1) 縁部は内湾する体部から内面に段をなして短く外反する。底部に小孔がある。	外面は調整不明。内面は上半がハケ調整、下半がへう削りする。	砂粒を含む。 焼成良好	明褐色	ほぼ完成品 SD-011
高坏	70	口径 19.1 筒高 6.6	1) 縁部は底部との接合部外面に横を形作り、ゆるく内湾しながら外上方に立ち上がる。	内外面ともにハケ調整し、後にへう削りする。	砂粒を含む。 焼成良好	淡黄褐色	脚部を欠く。 SD-011
高坏	71	口径 19.0 筒高 6.4	1) 縁部は底部との接合部外面に横を形作り、直線的に外上方に立ち上がる。	内外面ともにへう削りする。	砂粒を含む。 焼成良好	赤褐色	脚部を欠く。 SD-011
高坏	72	口径 17.5 筒高 13.0	1) 縁部は底部との接合部外面に横を形作り、直線的に外上方に立ち上がる。脚部は接合部から外下方に広がり、脚部中央に3個の小孔がある。	1) 縁部の調整は不明。脚部は外面をへう削ぎ、内面をへう削りする。裾部はヨコナゲ調整する。	砂粒を若干含む。 焼成良好	明褐色	1) 縁部を欠く。 SD-011
高坏	73	口径 14.0 筒高 8.5	脚部は1) 縁部から外下方に広がり、脚部中央に4個の小孔がある。	接合部はヨコナゲし、外面はへう削ぎする。内面はへう削りし、裾をヨコナゲ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	淡褐色	1) 縁部を欠く。 SD-011
器台	74	口径 8.9 筒高 2.8	1) 縁部は外上方にのびる受部から外面に横を形作り、短く直立する。	内外面ともにヨコナゲ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	灰褐色	脚部を欠く。 SD-011
器台	75	口径 9.1 筒高 7.8	受部は接合部から僅かに内湾ぎみに外上方に開く。脚部は外下方に開き、3個の小孔がある。	受部は外面をへう削ぎし、内面をヨコナゲ調整する。脚部は外面をへう削ぎ内面をへう削りする。	砂粒を若干含む。 焼成良好	明褐色	脚部を欠く。 SD-011

重	76	口径 6.3 器高 3.3	ツマミのびる中央はへこませている。口縁部は外下方に外反して広がり、上下に拡張した端面をもつ。	内外面ともにヨコナゲ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	黄褐色	良品 SD-011
重	77	口径 16.2 器高 6.9	口縁部は外面に稜を形作り、直立みに立ち上がる。肩部は短いが大きく外反する。	口縁部内外面はヨコナゲ調整する。 口縁部内面に指頭圧痕が残る。 体部外面はハゲ調整し、内面を逆削りする。	微砂粒を多く含む。 焼成やや不良	明褐色	胴部下半を欠く。 SD-012
重	78	口径 15.3 器高 20.0	口縁部は外面に稜を形作り、外上方に立ち上がる。 口縁部端面に7条の縦線文を巡らす。 体部は不安定で小さな平底をもつ。	口縁部内外面はヨコナゲ調整し、肩部内面に指頭圧痕が残る。 体部外面はハゲ調整し、内面を逆削りする。	微砂粒を含む。 焼成やや不良	明褐色	胴部上半を欠く。 SD-012
重	79	口径 14.9 胴径 19.2 器高 12.4	口縁部は外面に稜を形作り、外上方に立ち上がる。	口縁部内外面はヨコナゲ調整し、肩部内面に2段の指頭圧痕が残る。 体部の調整は不明。	微砂粒を多く含む。 焼成不良	緑褐色	胴部下半を欠く。 SD-012
重	80	口径 13.3 胴径 17.0 器高 19.5	口縁部は体部から屈曲して外上方に立ち上がり、端部が小さく内湾してわずかに内面を肥厚する。 体部は底部の横筋がある。	口縁部内外面はハゲ調整の後にヨコナゲ調整する。体部外面はハゲ調整の後にナゲ調整し、内面を逆時計回りにヘラ削りする。	砂粒を含む。 焼成良好	明褐色	ほぼ良品 SD-012
重	81	口径 13.0 胴径 16.1 器高 16.3	口縁部は体部から屈曲して外上方に立ち上がり、端部がわずかに内面肥厚する。 体部は丸底をもつ。	口縁部内外面はヨコナゲ調整する。 体部は外面がハゲ調整し、内面をヘラ削りする。	微砂粒を多く含む。 焼成普通	明褐色	ほぼ良品 SD-012
重	82	口径 16.5 胴径 23.3 器高 24.0	口縁部は体部から屈曲して外上方に大きく開き、端部がわずかに内面肥厚する。 体部はわずかな平底がある。	口縁部内外面はハゲ調整の後にヨコナゲ調整する。体部は外面をハゲ調整し、内面をヘラ削りする。	砂粒を多く含む。 焼成良好	褐色	ほぼ良品 SD-012
重	83	口径 16.0 器高 6.2	口縁部は体部から屈曲して外上方に立ち上がり、端部がわずかに内面肥厚する。端面は外傾する面をもつ。	口縁部内外面はヨコナゲ調整する。 体部は外面をハゲ調整し、内面を時計回りにヘラ削りする。	微砂粒を多く含む。 焼成やや不良	明褐色	胴部下半を欠く。 SD-012
重	84	口径 15.8 器高 5.9	口縁部は体部から屈曲して外反ぎみに外上方に立ち上がり直立する端面をもつ。 端面には2条の縦線文を巡らす。	口縁部内外面はヨコナゲ調整する。 体部は外面を縦のハゲ調整し、内面を逆時計回りにヘラ削りする。	微砂粒を含む。 焼成やや不良	明褐色	胴部下半を欠く。 SD-012
重	85	口径 16.2 胴径 20.7 器高 17.3	口縁部は体部から屈曲して外反ぎみに立ち上がる。 体部は無地で最大径を胴部中位にもつ。	口縁部内外面はヨコナゲ調整する。 体部は外面を右下がりのハゲ調整し、内面を逆反したヘラ削りする。	微砂粒を多く含む。 焼成やや不良	明褐色	胴部下位を欠く。 SD-012
重	86	口径 18.3 器高 7.3	口縁部は体部から屈曲して内直ぎみに立ち上がる。	口縁部体部ともにヨコナゲ調整する。	砂粒を含む。 焼成普通	明褐色	胴部中位以下を欠く。 SD-012
重	87	口径 18.0 器高 9.6	口縁部は体部から屈曲して外上方に立ち上がる。	口縁部内外面はヨコナゲ調整する。 体部は内面を横の時計回りにヘラ削りする。	砂粒を多く含む。 焼成良好	明褐色	胴部中位以下を欠く。 SD-012

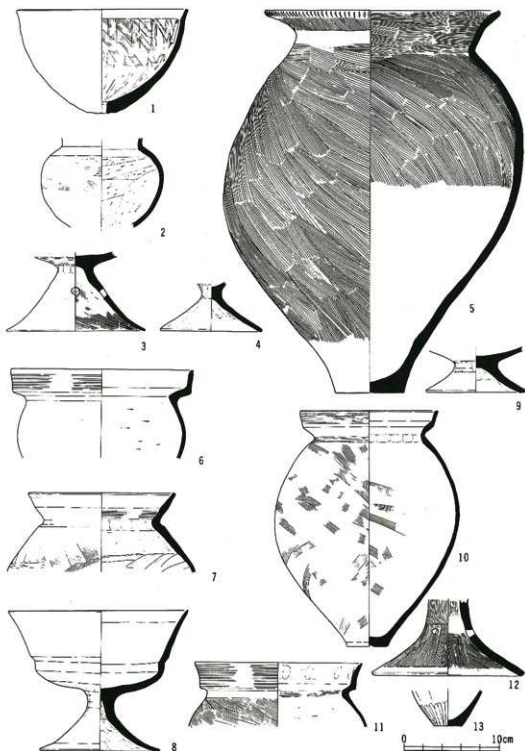
			する。外面は調整不明。	焼成不良		
雄	88	口径 24.5 胴径 29.4 器高 19.4	口縁部は体部から屈曲して外面に凸帯を形作り、外上方に立ち上がる。端面は外傾する。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部は外面をハケ調整し、内面を時計回りにへう削りする。	砂粒を含む。 焼成普通	赤褐色 胴部下半を欠く。 SD-012
雄	89	口径 15.3 器高 9.0	口縁部は体部から屈曲して外面に凸帯を形作り、外反ぎみに外上方に立ち上がる。 端面は外傾する。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部は外面をハケ調整し、内面をへう削りする。	微砂粒を多く含む。 焼成良好	明褐色 胴部中位以下を欠く。 SD-012
雄	90	口径 16.6 器高 10.5	口縁部は体部から屈曲して外面に凸帯を形作り、短く直立して内面に段をもち内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部は外面の肩部を横、他を右打りのハケ調整し、内面をへう削りする。	微砂粒を多く含む。 焼成不良	明褐色 胴部下半を欠く。 SD-012
雄	91	口径 15.6 器高 6.9	口縁部は体部から屈曲して外面に凸帯を形作り、外上方に立ち上がる。 端面はわずかに内傾する。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。	砂粒を含む。 焼成良好	灰褐色 胴部中位以下を欠く。 SD-012
雄	92	胴径 19.7 器高 19.5	体部は球形で大きいのが不安定な底部をもつ。	体部内外面ともにへう削りする。	粗砂粒を多く含む。 焼成良好	淡褐色 口縁部を欠く。 SD-012
雄	93	胴径 20.7 器高 18.6	体部は扁平な球形で最大径を下位にもつ。底部は小さいが安定した平底である。	体部は外面を丹念にへう磨きで仕上げ内面を丁寧にナゲている。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	明褐色 口縁部を欠く。 SD-012
雄	94	口径 15.4 胴径 26.1 器高 30.0	口縁部は体部から屈曲し、外上方に立ち上がる。端面はわずかに内湾する。 体部は球形で安定した平底をもつ。口縁部と体部の接合部外面に貼り付け凸帯が回り、その上をハケで連続削突する。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部は外面をハケ調整し、粗いへう磨きをする。内面は縦のハケ調整を上下2段に別けてする。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	黄褐色 ほぼ完品 SD-012 体部外面にカビ目が残る。
雄	95	口径 11.1 器高 4.9	口縁部は体部から屈曲して外上方に立ち上がる。端面はわずかに外反し、外傾する。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成普通	灰褐色 体部を欠く。 SD-012
長頸雄	96	口径 13.8 器高 10.3	筒状の口頸部はわずかに外上方に長くのび、端面が内傾している。	端面付近は内外面ともにヨコナデ調整し、他を縦野ナデ調整している。	微砂粒を若干含む。 焼成普通	明褐色 体部を欠く。 SD-012
雄	97	口径 21.4 器高 8.2	口縁部は体部から屈曲して外上方にのび、外面に縦を形作って大きく外反する。	端面の内外面は横のへう磨きし、以下をヨコナデ調整する。	砂粒を含まない。 焼成良好	明褐色 体部を欠く。 SD-012
雄	98	口径 15.8 器高 6.7	口縁部は体部からゆるく屈曲して外上方に外反し、外面に凸帯を形作って外上方に立ち上がる。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。端面は外傾する。	砂粒を多く含む。 焼成良好	淡褐色 体部を欠く。 SD-012
雄	99	口径 11.7 器高 9.2	口縁部は体部から屈曲して内湾ぎみに長く立ち上がる。	口縁部外面は端面と頸部をヨコナデ調整し、中間に縦のへう磨きをする。内面には横のへう磨きをする。	砂粒を含まない。 焼成良好	明褐色 体部を欠く。 SD-012
雄	100	口径 14.7 器高 9.2	口縁部はわずかに内湾する体部から段をなして外上方に立	口縁部内外面はヨコナデ調整し、体部をハケ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	赤褐色 ほぼ完品 SD-012

			ち上がる。 体部は安定した平底をもつ。				
台付鉢	101	口径 11.8 器高 7.6 底径 6.6	口縁部は半球形の内湾する体部の先端をわずかにつまんでいる。台は接合部が太く扁平でやや内湾がみに外下方に開く。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部は内外面ともにハケ調整し、内面に軽い放射状のへう磨きをする。台はヨコナデ調整する。	微砂粒を多く含む。 焼成良好	赤褐色	ほぼ完品 SD-012
台付鉢	102	口径 8.6 底径 3.8 器高 5.5	半球形の鉢に瘤状の台がある。	内外面ともにヨコナデ調整する。	砂粒を多く含む。 焼成良好	明褐色	ほぼ完品 SD-012
台付鉢	103	口径 8.4 底径 4.1 器高 5.4	半球形の鉢に瘤状の台がある。	内面とともにヨコナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成普通	明褐色	ほぼ完品 SD-012
高坏	104	器高 3.8	口縁部は底部との接合部外面に稜を形作り、外上方に開く。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。坏部内面は格子状にへう磨きし、外面はヨコナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	明褐色	頸部1縁部を欠く。 SD-012
高坏	105	口径 22.8 器高 7.9	坏部は内湾する皿状で小さな底部がある。	内面は放射状のへう磨きをし、外面は横のへう磨きをする。	微砂粒を若干含む。 焼成やや不良	明褐色	頸部を欠く。 SD-012
高坏	106	口径 21.1 器高 (6.8)	口縁部は底部との接合部外面に稜を形作り、外上方にのびて内面に段をもち、さらに大きく開く。	坏部内外面ともにヨコナデ調整する。内面に赤色顔料の塗彩の痕跡がある。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	明褐色	頸部を欠く。 SD-012
割台	107	器高 (7.7)	脚部は上下両端ともに外上下方に開く。外面に3条3段の凹線文が走り、中間を縦の連続斜交文でうめている。	脚部内面は磨削りする。	砂粒を若干含む。 焼成良好	褐色	受胎部を欠く。 SD-012
台付壺	108	口径 17.1 胴径 18.0 器高 19.4	口縁部は体部からゆるく屈曲して外上方にのび、外面に鈍い稜を形作って直立する。体部は最大径を上位にもつ。台部は接合部から外下方に開く。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部は外面を右下がりのハケ調整し、内面をヨコナデ調整する。台部は外面をヨコナデ調整し、内面を磨削りの後にヨコナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成やや不良	明褐色	台部を欠く。 SD-015
壺	109	口径 16.0 器高 5.0	口縁部は体部から屈曲して外上方に立ち上がり、内面に段をもつてさらに開く。端面は直立する。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部は外面をハケ調整し、外面を時計回りの横のへう磨きをする。	砂粒を多く含む。 焼成良好	淡明褐色	胴部中位以下を欠く。 包含層
壺	110	口径 14.8 胴径 15.5 器高 15.6	口縁部は体部から屈曲して外上方に外反して立ち上がる。体部は最大径を中位にもつ。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部は外面をハケ調整し、内面の上半をへう磨きする。	砂粒を含む。 焼成普通	灰褐色	頸部を欠く。 包含層
壺	111	口径 13.8 胴径 14.4 器高 10.3	口縁部は体部から屈曲して外上方に立ち上がる。体部は最大径を上位にもつ。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部外面は調整不明。内面はへう磨きする。	砂粒を含む。 焼成普通	灰褐色	胴部下位を欠く。 包含層
壺	112	口径 19.1 器高 10.0	口縁部は体部から屈曲して外上方に開き、外面に稜を形作って外上方に立ち上がる。口縁部端面には8条の縦凹線文を巡らす。	口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部は外面を横のハケ調整し、内面を逆時計回りのへう磨きをする。	砂粒を多く含む。 焼成良好	淡褐色	胴部中位以下を欠く。 包含層

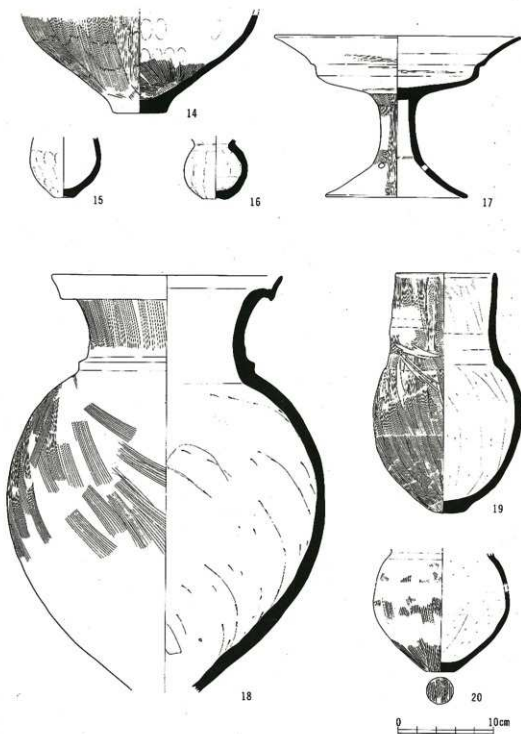
第4表 上助生田遺跡江跨・ハケ坪・塚町地区SD-006出土土器観察表

器形	番号	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・質	色調	備考
杯	113	口径 13.9 器高 3.0	体部は底部から明瞭に屈曲し、内湾きみに立ち上がる。	体部は回転ナデ調整する。	砂粒を含まない。 焼成良好	淡灰色	1/5底存 SD-006
杯	114	口径 14.0 器高 2.9	体部は底部からやや丸みをもって立ち上がり、直線的に外上方へのびて口縁部でわずかに内湾する。	体部は回転ナデ調整する。	砂粒を含まない。 焼成良好	淡灰色	1/5底存 SD-006
杯	115	口径 12.0 器高 3.2	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	砂粒を多く含む。 焼成良好	黄灰色	1/2底存 SD-006
杯	116	口径 12.6 器高 3.1	体部は底部から直線的に外上方へのび、口縁部でやや内湾する。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整し、内面は仕上げナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	黄灰色	1/3底存 SD-006
杯	117	口径 11.4 器高 3.0	底部はやや厚い。体部は底部から丸みをもって立ち上がり、直線的に外上方へのびる。底部外面は門状を呈す。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	黄灰色	1/2底存 SD-006
杯	118	口径 12.7 器高 3.5	体部は底部から内湾きみに立ち上がった後、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を多く含む。 焼成良好	灰白色	2/3底存 SD-006
杯	119	口径 13.1 器高 3.0	体部は底部から明瞭に屈曲した後、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	砂粒を含む。 焼成普通	灰白色	3/5底存 SD-006
杯	120	口径 12.8 器高 3.2	底部は厚い。体部は底部からやや丸みをもって立ち上がり、内湾する。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りする。	微砂粒を含む。 焼成良好	黄灰色	4/7底存 SD-006
杯	121	口径 15.1 器高 2.7	体部は底部から丸みをもって体部は立ち上がり、やや外反する。	体部は回転ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成やや不良	灰白色	1/3底存 SD-006
杯	122	口径 12.8 器高 3.4	体部は底部から明瞭に屈曲し、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	砂粒を含まない。 焼成良好	黄灰色	3/4底存 SD-006
杯	123	口径 13.4 器高 3.5	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	砂粒を多く含む。 焼成良好	黄灰色	2/3底存 SD-006
杯	124	口径 12.8 器高 2.8	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	砂粒を若干含む。 焼成良好	黄青灰色	4/5底存 SD-006
杯	125	口径 13.0 器高 3.4	体部は底部からやや丸みをもって立ち上がり、内湾する。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りする。	砂粒を含む。 焼成良好	灰白色	4/5底存 SD-006
杯	126	口径 12.8 器高 3.3	体部は底部から明瞭に屈曲し、直線的に外上方へのびる。口縁部でわずかに内湾する。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	砂粒を若干含む。 焼成良好	黄灰色	4/5底存 SD-006

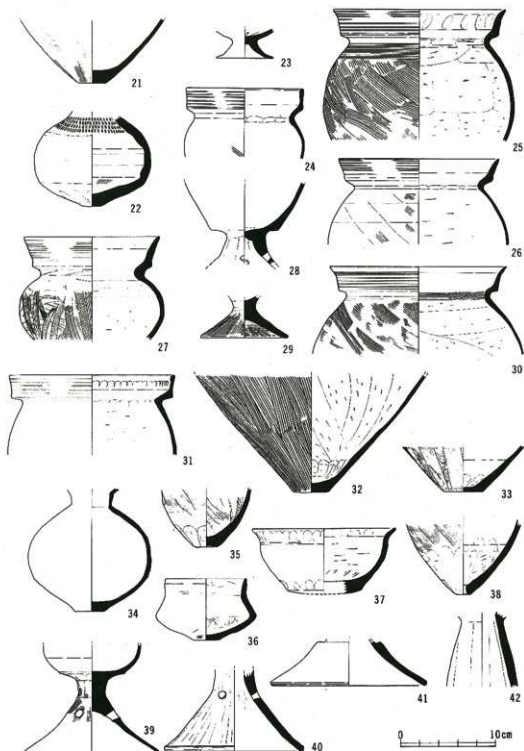
杯 A	127	口径 12.2 器高 3.4	体部は直線的に外上方へのびるが、口縁下端でわずかに屈曲し、上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整し、内面を仕上げナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	灰白色 3/5遺存 SD-006
皿	128	口径 10.0 器高 2.2	断面方形の内面端部を接合面とする高台をもつ。体部は内両ぎみに立ち上がる。	底部外面は回転ヘラ切りする。	砂粒を含まない。 焼成良好	灰白色 1/7遺存 SD-006 灰釉陶器
蓋	129	口径 17.2 器高 2.7	器高が高く、中央が凸状を呈するフタミをもつ。平たい笠形を呈し、口縁部は明瞭に屈曲するが、内面はなだらかである。	体部は回転ナデ調整する。 大井部内面に仕上げナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	灰白色 1/2遺存 SD-006
皿 A	130	口径 12.0 器高 2.0	体部は底部から明瞭に屈曲し、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りする。	砂粒を若干含む。 焼成良好	灰白色 3/5遺存 SD-006
皿 A	131	口径 17.4 器高 2.5	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	灰白色 3/4遺存 SD-006
皿 A	132	口径 16.8 器高 2.5	底部はやや丸みを帯びる。体部は内両ぎみにのびた後、口縁部でわずかに外反する。	体部は回転ナデ調整する。	砂粒を含む。 焼成良好	青灰色 4/7遺存 SD-006
皿 A	133	口径 17.0 器高 2.8	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、外反ぎみにのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。内面は仕上げナデ調整する。	砂粒を含む。 焼成良好	青灰色 2/3遺存 SD-006
皿 A	134	口径 17.0 器高 2.4	体部は底部から明瞭に屈曲し、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	暗灰色 3/5遺存 SD-006
盤	135	口径 18.4 器高 2.7	体部は底部から明瞭に屈曲し、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りする。	砂粒を若干含む。 焼成良好	灰白色 5/6遺存 SD-006
皿 B	136	口径 19.2 口径 14.8 器高 3.1	断面方形の内面端部を接合面とする。高台をもつ。体部は内両ぎみにのび、口縁でわずかに屈曲する。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	灰白色 3/7遺存 SD-006
杯 B	137	口径 16.2 口径 9.8 器高 6.2	断面長方形の内面端部を接合面とする高台をもつ。体部は底部から丸みをもって直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	淡灰色 3/3遺存 SD-006
杯 B	138	口径 14.0 口径 10.5 器高 3.9	断面方形の高台をもつ。体部は直線的に外上方へのびるが、口縁部でわずかに外反する。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	砂粒を含む。 焼成良好	暗灰色 4/5遺存 SD-006
杯 B	139	口径 17.4 口径 11.9 器高 5.2	断面方形の内面端部を接合面とする高台をもつ。高台接合面から丸みをもって立ち上がり、体部は直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。	砂粒を含む。 焼成良好	暗灰色 2/3遺存 SD-006



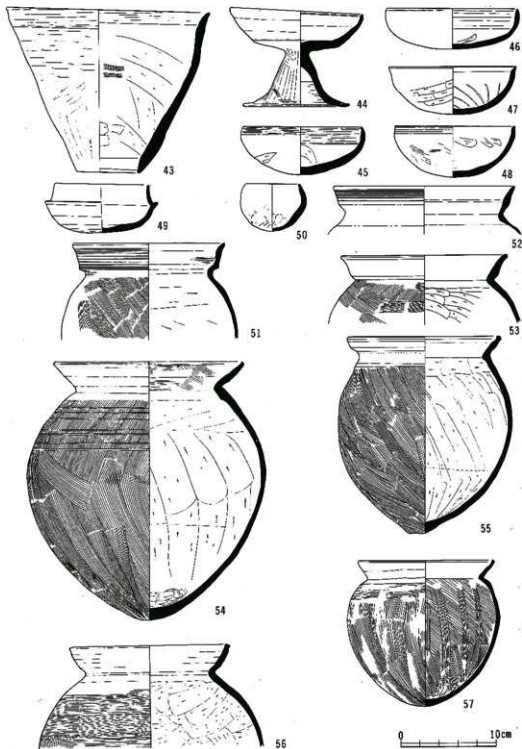
第17图 上蔦生田遺跡江跨地区出土土器実測図1 (1~13)



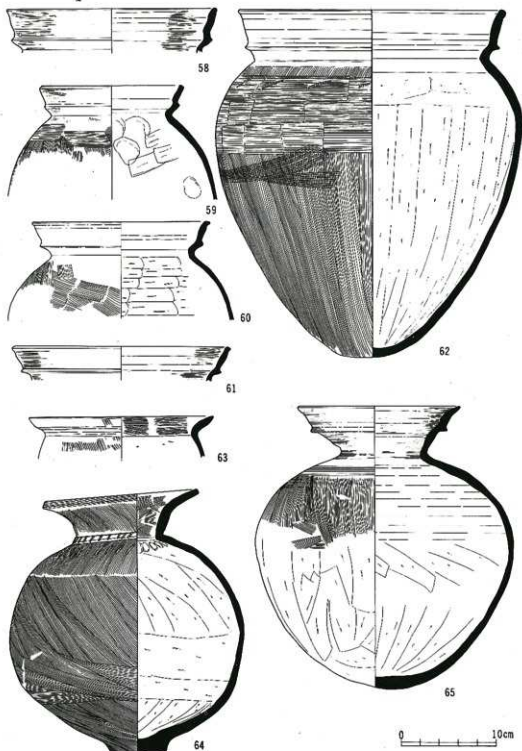
第18図 上野生田遺跡江跨地区出土土器実測図2 (14~20)



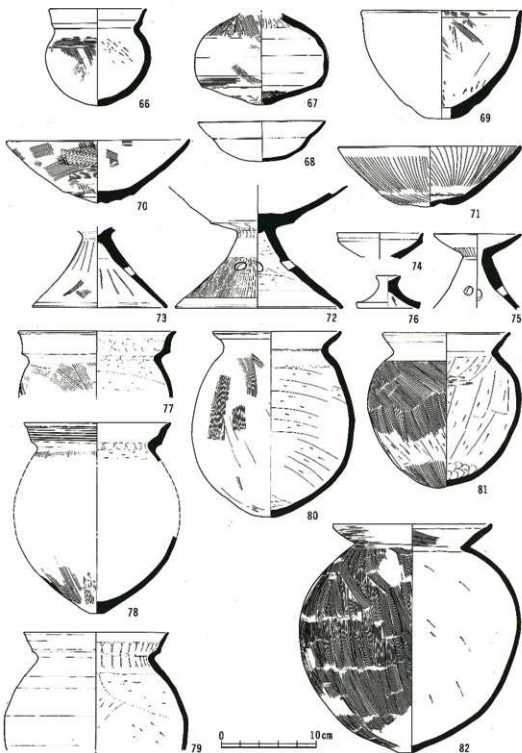
第19图 上苑牛田遗址江跨地区出土土器实测图3 (21~42)



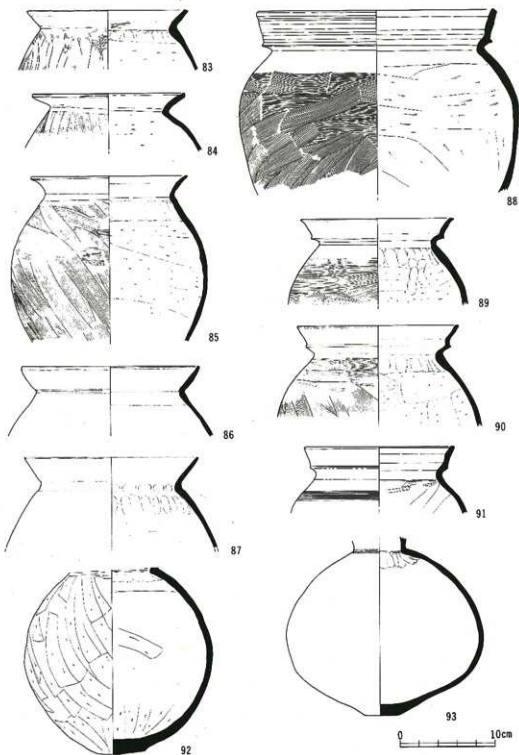
第20図 上叡生田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器実測図1 (43~57)



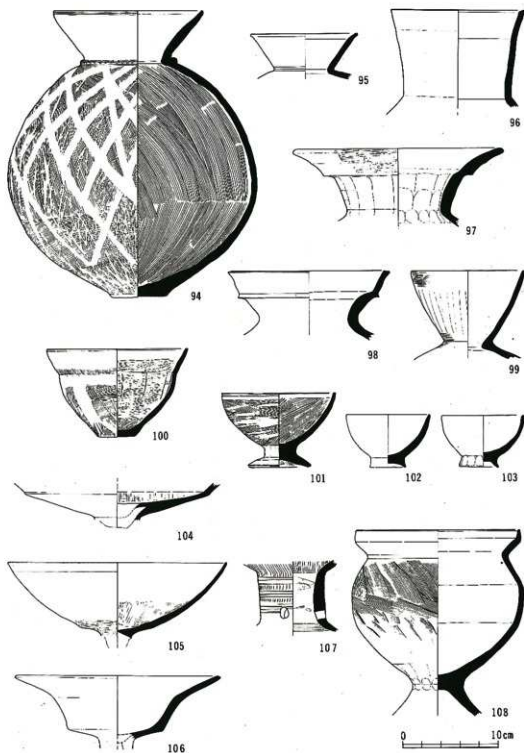
第21図 上蔦生田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器実測図2 (58~65)



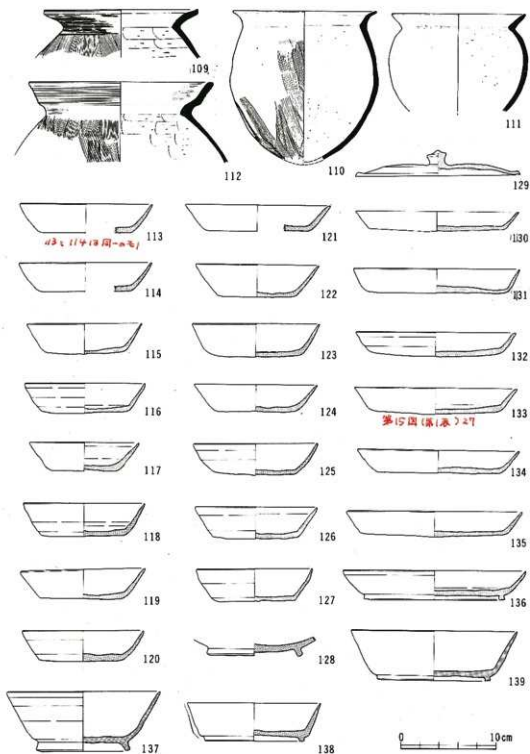
第22図 上筋生田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器実測図3 (66~82)



第23図 上薮生田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器実測図4 (83~93)



第24図 上筋生田遺跡八ヶ坪・塚町地区出土土器実測図5 (94~108)



第25図 上筋生田遺跡 S D - 006出土土器実測図 6 (113~139)

第4節 小結

本遺跡から検出された遺構は、上筋生田遺跡第1次調査時に検出された遺構との関連を考えねばならない。

江跨地区の3区南西隅と6区で検出された自然の旧河道の肩は、4・5区の調査結果から同一の遺構の肩であり、210mほど北の上筋生田町八ヶ坪・塚町地区で検出された旧河道と昭和49・50年に北陸自動車道に伴って福井市上河北町・上筋生田町で実施した上筋生田遺跡（上河北遺跡）第1次調査でも検出された旧河道と同一のものであることが推定された。各地区で検出した旧河道はシルト・砂と樹木や草の植物遺存体が互層をなして織り、各地区で出土した須恵器に墨書された字句も同じものがあった。肩の状態は3区でなだらかであるのに対して6区ではほぼ垂直に近い状態であった。このことは、水流の関係で、侵食の激しかった部分とそうでない部分との差と思われる。

江跨地区での検出遺構は大別して西半の3・4・5・6区を占める自然の旧河道と、1・2・3区に集中する人為的な3条の溝と2基の土竈と不定形の落ち込みとに分けられる。旧河道からは須恵器・銭貨・植物種子類が出土している。時期的には、奈良時代から平安時代にかけての所産であることから、この旧河道が上筋生田遺跡第1次調査と八ヶ坪・塚町地区で検出した旧河道と連続するであろうことが、推定された。

八ヶ坪・塚町地区の14区・15区から検出された2条の溝状遺構は北陸自動車道関連遺跡調査で実施された上筋生田遺跡第1次発掘調査の調査区内で検出された溝状遺構と連続するもので、14区の溝状遺構は第1次調査のA溝南流と合致し、15区の溝状遺構は第1次調査のA溝北流と合致するものであることが、遺構の構造、出土した遺物等から判明した。16区で検出した2条の連結ピットSD-013・014は、柱間寸法が通常の掘立柱建物の柱間寸法にしては狭いことから2条の櫓列であろうと思われる。この櫓列については延長の調査ができなかったために性格が不明であるが、第1次調査では検出しておらず、遺跡を囲むとは思われない。

また、第1次調査で検出した1号方形周溝墓の西溝を検出している。

上筋生田遺跡は第1次調査で北陸自動車道の道路敷きにかかる部分について調査したが今回隣接する2カ処を調査したことによって範囲をほぼ確定することが出来た。

これらの遺構から出土した遺物は、弥生時代から平安時代に至る各時代にまたがり、弥生時代の4様式の甕を最古として5様式の長頸壺などが見られる。

古墳時代になると甕の口縁部端面に縦凹線文を巡らす、いわゆる月形式土器から畿内の影響を強く受けた口縁端部に内面に肥厚させた甕と、複合口縁の口縁部端面の下端に凸帯を巡らした在地的な甕が混在していた。

この他に、古墳時代末から奈良時代にかけての遺物が少ないものの奈良時代の末以降再び出土量を増してくる。このような出土傾向は上筋生田遺跡第1次調査時と同様に遺構とともに同一遺跡であることを示している。

(山口)